

---

# 神殺し～優しい殺神鬼～

廻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神殺し～優しい殺神鬼～

### 【Zコード】

Z7955X

### 【作者名】

廻

### 【あらすじ】

近衛一族 大昔にとある宣託を受け、呪われてしまった一族。そこに生まれた、鬼子、近衛無音。彼は十七年間、何度も死にかけながら、鍛錬を続けた。神を、殺す為に。 そんな彼は、かけがえないものを失い、かけがえのないことを知った。だけど、それはもう遅く、気づくには遅く……。 直球で言います。最強モノです。

## 終わった死と、始まった生（前書き）

目指せ、お気に入り件數十件！！  
そんなお話しです。

## 終わった死と、始まった生

「 僕は、無力だ」

神と呼ばれる存在がいた。

大昔に、僕の一族にとある宣託が授けられた。

異界の神が、現世に現れ、世界を喰らい尽くすと。

その神を殺すために仕上げられた。神を殺す為だけに、愛の無い性交によって産み落とされた僕。神を殺す為のみに、この世に存在を許された僕。

食事をするのも、家に住むのも、服を着るのも、息をするのも、勉強をするのも、鍛錬をするのも、歩くのも走るのも、考えることも「うやつて、生きていること」でさえ、神を殺す為だったはずなのに。

「 ここ、され……」

「 一音かずね」

苦しかった。辛かった。泣きたかった。

肉体を強化するために、定期的に体の細胞を破壊する術式は毎日、僕の心身をすり減らしていった。

食事には、いつも致死量ギリギリの秘伝の毒薬が混ぜられ、食べるたびに血を吐き、体を痙攣させ、意識を混濁させた。

一日のノルマを達成できねば、妹を殺すと脅された。 実の、父親から。

会えるのは、一週間の内一日だけで。だけど、だけど、それを、会えることを思えば、父上からの拷問とも取れる鍛錬にも耐えることが出来た。

妹は、僕の母上がいつまでも次子を孕まなかつたため、次候補の女性との間に生まれた、腹違いの少女だ。

男子は神殺し。  
女子は神封じ。

二人一組。二人で一人。二つで一つ。  
神と戦う。神を殺す。

十七年間。僕は神と戦う、神を殺す術を身につけるために、殺されかけた。幾度となく、際限なく、終わりなどないかのように。

十七年後の十二月二十五日。世間ではクリスマスというキリストの誕生日。雪が降るその夜。

僕の一族 近衛家が殺すことになる、異界の神。フガクが、その姿を現した。

雄叫びを上げながら、次元を切り裂き、純白の鬼のような姿をし、理性を失ったフガクが、顕現した。

戦いは七日ほど だつたと思う。

除夜の鐘が鳴り響くのが、いくつもの山の向こう側から、遠く遠

く、聞こえたから。

しんしんと降り積もった純白の雪が、真紅の血によって、赤黒く染め上げられていた。周りの山々はいくつもその背を低くし、地盤そのものが崩壊していた。

だが。

勝った。フガクの体から発せられる神々しい光が消え、純白の鬼のような姿はしほみ、人の体となつて地に伏している。

「一音……一音ツ」

「にい、さまあ……」

一撃を、必殺を、山をも大地をも吹き飛ばす一撃必殺を、一音がもひつた。深い黒の長髪が血に塗れた。腹に穴が、向こう側が見えるほどの穴が、開いた。

「にいさま……無音にい、さま」

「……一音、なんで、……なんで僕を」

止めを刺そうとしたそのとき、フガクが理性を失つた最後の一撃を放ってきた。夜の闇を照らす、光の槍だつた。

僕は、僕は、構わず突進した。黒刀を構えたまま。まっすぐに、脇目も振らず、真つ直ぐに、これで終わらせるための、最短距離を突き進むために　　真つ直ぐに。

僕と、フガクの間に。

横から一音が飛び込んできて、結界を張った。僕と、フガクの間に。

結界は、数秒ともたず、穴をあけてそのまま一音の腹も貫き通した。

僕はフガクに突進していた。体を止めることなく、神を殺すほどの威力を持つた黒刀で、フガクを斬り伏せた。

「なん、で……」

「わたくし、は……にいさまの、ことが……大好き、ですか

「なんッ！？」

どの道、こうなるのか。

倒れ伏せたフガクの指から、一條の光が伸びるのに、全く気付かなかつた。いや、むしろ、気付いていたとしても避けなかつたかもしない。だつて、それは 同じだから。

僕の心臓ごと、胸がごつそり消え去つた。

「にいッ！？」

ゆつくりと、一音の上に覆いかぶさつた。なるべく、衝撃を「え ないよ」。多分、もう痛みすら麻痺しているとは思ひ、その小さな体に。

「…………一緒に。一緒になんだ、一音。僕も 大好き、なんだ」

そつと、耳元で囁いた。視覚すらもほとんど失われている一音には、聴覚の実が唯一の情報源だったから。せめて、安心して、逝かせてあげたいんだ。

最後の最後で、この立派な妹の、兄らしく。

小さな、それは小さないと形容していい声だ。いや、声とは形容するのは、少しだけ憚られる、そんな音が、彼女の口から漏れた。ぼそり、ぼそりと、一文字ずつ区切られるその音を、耳を寄せて必死に聞いた。

五音。たつたの五音の音を発するのに、一分の時間を要した。

『ありがと』

そんな『言葉』を伝えて、守るべき彼女は、ゆっくりと、心臓の動きを弱めて行く。

「…………ああ」

僕は、体を仰向けにした。妹と体が並ぶよつに。ぎしきしこと、雪が僕の体重で押し固められるのが分かる。彼女のか細くて浅い息が、どんどん弱くなつていくを感じながら、空を体全体で見上げた。

「一音…… 雪つて言ひのは、なんだか、綺麗なもんだ、な」

指の先から、どんどん温かみが消えて行くのが分かる。動かなくなる前に、一音の頭を包み込んだ。

「 ハッピーバースデイ、かずね

喉の奥から、多量の血液がせり上がりってきた。  
無意味にもかけた法術がとけてきたみたいだ。  
口の中で血が泡立つのを感じる。息が、し辛い。

「は、はは、……おやすみ」

僕は、妹の冷たくなつていく体を抱きしめたまま、ゆっくりと目を閉じた。

最後に聞こえたのは、何かが、雪を踏みしめている、音だった。

神は、基本的に死ない。

神が死ぬ時、それは、誰からも忘れ去られたときだ。誰の記憶にも留められず、恐怖の念を得られない神は、自然に消滅する。

フガクもまた、そうだ。

その存在を支える存在は、この世界ではなく、遠く離れた異世界にある。

彼としては、自分が何をしているのか分からなかつたものの、自分が何をしでかしていたのかぐらいは分かつていた。  
理性を失い、次元を切り裂き、そのせいで本来はあつてはならな

い多くの人間を因果という鎖に縛り付けてきたのだ。

目の前に転がっている、二つの若人も。

まだ、命は潰えてはいない。伊達ではなく、この一人は暴走した彼の力を上回った。世界を滅ぼす、その力を。

だが、少女の方の命は、もう尽きかかっていた。

そう思つた時にはもう、彼女の命の灯は、完全にこの世界から離れてしまつた。こうなれば、もうなにをすることができるわけでもない。

何故、自分が理性を飛ばしていたのかは分からぬ。誰かの陰謀だつたのかもしれないし、もしかしたらふとした拍子に飛んでしまつたのかもしれない。

だつたら、この惨劇の、数百年に渡る悲劇の責任は自分にある。誰かの陰謀だつたとしても、誰かの策略だつたとしても、それにかかるつてしまつた自分の所為だし、ふとした拍子なんかはなおさらだ。

彼は、異界の神だ。

この世界では充分に力を振るえない。神ではなく、化物として、理を統べる存在ではなく、力を振るうだけの存在としてしかいられない。

ならば、この少年を自らの世界に。

自らの世界に呼ぶことによつて、新たな生活を、新たな人生を送つてもいいつ。

しかし、何分我が身は転生などが出来るほどの神格は持ち合はせてはいない。ゼロからのスタートなどムリだ。

それはもう、どうしようもない。

だからこそ、彼の世界で、彼の力を存分に振るい、少年を生きながらえさせ、新たな生活を、人生を送つてもらひ。

あの世界に送つてしまつたら他の神々がいるので、治療以外は手出しは出来ないが、今この時を見捨てるよりはマシだらひ。

神だから人の気持ちが分からぬなど、そこまで高慢になつたつもりはない。

だから、足元で転がる、この若人を生きながらえさせたいと願うのも、なんら不思議なことではないのだ。

少年に向けて、光り輝く指を振つた。

空間が裂け、次元が裂け、異世界への扉が現れる。

少年を抱きあげ、その扉へと勢いよく足を踏み入れた。そこには何の躊躇もなく、ただ、前へと進むのみだつた。

「『フール』へ」

数秒後。膨大な爆音とともに、異界へとつながる扉は閉じた。その衝撃で巻き起こつた巨大な雪崩によつて、この場で起こつたすべての事柄が埋め尽くされた。少女の抜け殻の体も、全て。

残つたのは、純白の雪だけであつた。

暖かな木漏れ日が差し込む木陰に、一人の少年が腰を木にかけ休んでいた。この場合は休んでいたというより、寝ていたと表現した方がいいかもしない。

現に、少年は健やかな寝息を規則正しく漏らしながら、『胸』や『腹』を上下させているのだから。

そんな木の上で、青い雛鳥が甲高く、それで耳心地の良いさえずりをした。

「……ん、んん」

体を動かしたのは、黒髪の見事麗しい少年だった。さらさらとした黒髪を、気をゆつくりと撫でる風に揺らしながら、その瞼を開けた。瞼の奥には、紅い瞳があり、その紅い瞳は周囲を数回見回すのだった。

「……ここが、極楽か？」

手を握り、息を吸い込み、手を開き、息を吐きだす。

父親から施されていた細胞破壊の術式も解けていて、体の調子もすこぶるいい。むしろ、羽のよつな軽さの所為で、逆にどこか悪いのではないかと思うほどだった。

「極楽、にしては、仏も觀音様もおられない。ここは、どこなのだろ？」

とりあえず、座つたまま周りを見回した。

小高い丘、だろうか。周囲に広がる森林を見渡せるということは、幾分か周りより高い位置にあるということだろう。なので、小高い丘という表現は間違つていはないはずだ。

「それにしても……日本に、こんなところはあつただらうか？ 無かつたような気がするけど……」

そういうえば、だが。極楽には所持品がついてくるのだろうか？ 腰には、鞘に納められた黒刀が差されている。極楽にこんなものを持ち込むとは、なんて不躾なのだろう、と無音は若干顔を赤らめた。

「……極楽では、ないよなあ」

極楽といえば真っ先に思いつくのが『蜘蛛の糸』なのだが、そんな彼の思考パターンからすると、森がただただ広がる場所を極楽だとは思えないらしい。

「……一音は、いない、か」

法力を練り、法術を発動する。法術といつても大したものではなく、周囲五百メートルの物体を探る程度のものだつたが、充分だつた。

周りに小動物などはいるが 愛しい妹の姿が、どこにもない。

「まだ、温かい、な」

最後に一音を抱きしめた腕が、まだ、彼女のぬくもりが仄かに残

されている。

何故、自分一人が、このような場所に来てしまつたのだろうかと、後悔する。出来るならば、死後は妹のそばにいてやりたかったというのに。彼女の願いを叶えてあげたかったというのに。

どこの誰かは知らないが　隨分と余計なことをしてくれたものだと、そう思う。

だが、余計なことはしてくれたが、この命、妹が命を懸けて守つたこの命　余計なところなど、一つもありはしない。どにろか、身に余る命だと、矛盾した考え方浮かんでしまう。

「……『生きる』とするか」

あの世界では、妹との時間以外、生きているといつ実感が持てなかつた。全部が全部、末端から先端までが、培養機の中で育てられた、いざれ壊れると分かつていて予定調和に支配されている気がして、ならなかつた。

その予感は大方当たつていた。当たつたところで、それを回避するだけの力が自分には無かつたのだが。妹が死に、自分も死にかけた。なまじ、体の鍛え方の違いだったのかもしれない、そう思う。死ぬだと生きるだと、そんなことはどうでもよかつたのかもしれない。あの世界では、生と死の境界線をあやふやにしていなければ、一つの区切りに囚われて、あつという間にその身を散らすのだ。

兄のよう。

「生きるといつても、何をすればいいのか見当もつかないけど……」

小難しく考えるのは、自分の悪い癖だと、そう思つ。  
シンプルに考えよう。

心臓が動いていれば、生きている。

それ以上でもそれ以下でもない。心臓が止まれば、人間は死ぬの  
だし、逆に心臓が動いていれば人間は生きているのだ。

当面の目標は、心臓を止めないこと。

外敵からはもちろんのこと、自分でも止めないようになければ  
と、決意を固める。

「まあ、ボチボチ生きて行くさ。もしかしたら、本当にご都合主義  
かも知れないけど、一音の生まれ変わりとかに会えるかもしない  
し。……希望を持つても、いいんだよな」

座つたまま、地面を見下ろした。柔らかな緑草が木漏れ日に照ら  
され、ぴかぴかと陽気に光る。

そのどこにでもある草の上に　びにもない、一滴の水が、滴  
り落ちた。

「　　さようなら、一音」

彼の腕から、一音の残骸ぬくもりが、消え去つた。

終わった死と、始まつた生（後書き）

「」感想」「批判」「指摘、お待ちしております

## 第一話・確認と説明と 邂逅と（前書き）

人類を発見しました。今から接觸を試みます。

「異界に来てしまった、というわけか」

そんなことをぼやく無音。その息には乱れなどなく、平常心そのものと言つた様子で、少し浮かれ気分のステップの様なものをとりながら

双頭の巨怪鳥を相手取つていた。その姿は禍々しい黒い羽根に覆われていて、鋭く伸びた嘴が地面を穿つていく。

ようするに、双頭の鶴だ。

こんな生物は地球上にいなかつたし、もしいたとしたら人間は繁栄できなかつただろう。

「クワアアアアアアアッ！」

しかし、鳥だ。鳥である。どんなに団体を大きくしようとも、鳥であることに変わりはない。有り体に言えれば、食料としての鶏肉程度の存在だ。

だがしかし、無音には一つか二つほど心配ごとがある。

それはこの世界に存在するためにはとても重要なことで、もし駄目だとしたら、食料や水を一口でも口にすれば死んでしまう……だろ？。

それは、細菌などの極小生物の存在が第一に来る。地球上の生物

はそれら極々小さな生物たちと共に存していった。上手く上手く。もし、地球上に地球外生命体がやってきたとしても、食事などはすることが出来ない。

……まあ、煮るなり焼くなりすればよいだけなのだろうが。

「クワア！」

「クワア！」

二つの頭が、二つの嘴が、同時に無音の頭を狙い、地面を穿つその一撃が振り下ろされた。当たれば、熟しきつた果実さながら、目にもとめたくないスプラッターになるであろうその一撃を

両手で掴んだ。

ズンッ！　と、無音の両足が地面を陥没させる。

「ツ！　クツ！」

「ツ！　……ア！」

嘴を握りしめられ、上手くさえずりを上げられなくなつた双頭の鴉。

そんな異形の生物を、少し憤怒を混ぜたような表情で睨みつける。トリハダが立つのを感じる一羽にして一羽の凶怪鳥。

「考え方してるんだから、少し黙れ」

それをおこなつた当の本人は、涼しい顔でそう言った。

そして、何かに気付いたように、ハッ！　とした表情になると、無表情に体を震わせる双頭の鴉を見やると、

「そりだな…………羽を筆らないと、喰えないか

双頭の鶴の血の氣がサアッと引いたのが分かる。いや、これから分かるように羽を筆つていくのだが。

握った双頭の鶴の嘴 顔面も含める を地面に突き刺す。めり込ませるという表現も可能だ。

体の強度は高いらしく、その程度では潰れなかつたがもはやピクリとも動かなくなつたその体。脳震盪か何かでも起こしたのだろう。脳が二つあるので振動も二倍だ。

「ふー…………ちやつちやと、解体しますかね」

そういうと、腰に差していた黒刀を手に取る。

法力、というモノがある。それは、一般に氣だとか言われるもので、実際もそんなモノだ。

この黒刀は、大雜把に言つと、法力を込めるとな威力がアップする漫画とかでよくある刀である。その威力をのぞいて、だが。

無音は、黒刀を振り下ろした。

それはとてもない威力で 詳しく説明するのも億劫なので省くが、よつするに、でつかい鶴ごと、大地も切り裂いたということだ。

「『リサウツセキ』」

そう言いながら両手を合わせる無音。彼の前には三メートルほど  
の生物の骨と、葉っぱの上に置かれた多少の肉がある。どうやら、  
葉の上にあるの以外は食べたみたいだ。

彼の体積より食べた体積の方がどう見ても多い、なんて野暮なこ  
とは言わないでおこう。

「この肉は、どうしようかな。干し肉にするのが、いいかな」

しかし、こんなとこ何日も居たいわけではない。どちらかと  
いうと、早くこの世界に人間がいることを確認したいと思っている  
のだ。

なので、手っ取り早く水分を奪う方法として、法術がある。  
水分を奪つには乾燥させればいい。それならば火で炙るなりすれ  
ばいい。

これをして待つてはいるのは干し肉ではなく焦げ肉だ。いかに毒  
薬を常時摂取していた無音だとしても、こだわるのなら味にもこ  
だわりたい。

ようするに、水分を奪いたいのなら、水を操作すればいいだけの  
ことなのだ。

「水よ。こい」

みずみずしかつた鶏肉が一瞬でミイラのように乾いてしまう。法  
術とは、呼びかける『対象』と、呼びかけた『命令』が一致してい  
れば発動する。逆に、『炎よ。腐れ』などの意味不明な『命令』は

発動しない。

そして、言葉には多重の意味がある。『い』には水が涸れるの『涸』、時間が経過するという意味での『古』。『い』には『移』と、他の場所に移すという意味も込められる。そして『こい』には『来い』という命令がある。色々と省いているが、文字一つ一つに膨大な意味が込められるのが、日本語というものだ。

極限的に言うと、『水よ。こ』だけでも法術は発動する。

今のは水を肉から適量自分の前に移動させただけだ。

「まあ、水はいつでも作れるし、火も同じだから……一週間は、大丈夫かな？」というより、足りなくなつたらそこら辺で狩りをすればいいだけか

奪う命は最小限に。生かせる命は最大限に。  
自分には生殺与奪を軽く行える、という自覚があるからこそ、  
制約。誓約。

驕っているわけではない。思いあがつているわけではない。ただ、現実を述べているだけだ。ここまで言えば自分の力に自信があるだけの嫌な奴にしか見えないが、彼にはそんな自信は欠片も無い。だが、自覚はしている。自覚なき暴力を振るうより、マシだろう。

そんな考え方をしていると、無音の肩がぴくりと動いた。驚きなどではなく、何かに気付いたような、そんな感じ。

「 煙と、悲鳴と……人の、血の臭い？」

森の木々の間を爽やかな風が奔り抜ける。無音の髪もそれに撫でられ、さらさらと動く。

その風に、血の臭いが乗っていた。それも、人間特有の血の臭い。塩分が混じった、不味そうな血の臭い。

「へえん。人は、やっぱりいるのか」

いたとしても、どうだろうか。人間という種族は、いくつもの奇跡が重なって生まれた存在だ。地球という箱庭が育んだ最高傑作といつてもいいだろう。

そんな最高傑作が、まったく同じ形で、同じような文化経路をたどつて、まったく別の別世界に存在しうるのかどうかという問題。いたとしたら、それこそが一番のご都合主義なのだろう。

「……風よ。探れ」

今回は、探るという意味以外に付与した意味は無い。よつするに、風という存在に探るという意味を付与しただけだ。

彼を中心として風が巻き起こる。森がざわめき、動物の唸り声が方々から聞こえた。

風に『乗せて』、様々な情報が彼に伝わってくる。  
そして、

（馬車に、……生存している人間は女性が一人、男性が十人。女性の周りには鎧を着た人間が死んでいる……か）

文化水準は中世から近世ヨーロッパあたりと見て差し支えないだろう。ただ、その女性が使っている『術式』が、無音とは違う方式で行われているものなのだが、まあ、それは異界だから方式も違うのだろう。魔術や神術とかいう類のモノかもしれない。

少し、興味が沸いた。

「まあ、黙つて見捨てて黙つて死なれるのもあれだしな……言つてみれば、気分が悪くなるから助けようつていう、所謂ツンデレってやつかな。一音が僕にいつも言つてたやつだ……」

あれ？ いい気分のする言葉じゃなく感じてしまったのは何でだ？ 一音に言われたらあんなに気分が晴れ晴れとしていたのに……。

そこで無音は氣付いた。ようするに、自分は一音といられればそれでよかつたのかもしれないな、といつて、今更ながらに気付いた。

先に氣付きたかった後悔。祭りの後の憂鬱。  
そんな感じだ。

そんなときに、一音以上氣分を悪くされてたまるものか、と無音は空を仰ぎ見ながらぼやいた。空には、太陽が一個、燐々と陽光を照らしている。雲はまばらに散り、いい昼寝日和だ、と思つたが、無粋な黒い煙が一本、遠くの方で立ち上つていた。

法術を使うまでも無かつたか、と。

「 悪くない、な」

人助けをするのも、悪くない。そんな気分だ。

彼はそんな自分の心境の変化に苦笑いをしつつ、身を四足獸のよう屈め、地面を蹴り飛ばした。

地面が爆ぜた、と認識できるにこな、もつ少年の姿はそこにはなかつた。

ただ、少年が向かう先は容易に予測できる。

「ふえ、ふええ……」

怖い、恐い。

なんでこんなことになつたのか分からぬ。ちゃんとちゃんと冒険者の護衛をギルドから雇つて、このウィード森林を抜ける算段を立てたのに。

冒険者になり立てのボクでも、それぐらいのお金はあつたんだ。貯めたつていう方が正しい。Cランクの冒険者になつて、地道に依頼をこなしていつて、一年かけて貯めたお金だつたんだ。

けど、嵌められた。嵌められたんだ。

雇つたBランクの冒険者五人の内、三人がここいら辺を根城にしているつていうBランク相当の野盗集団と、内通していた。そもそもが、こんな手口を使う奴らだつたのかもしれないけど。

いきなりスレイプニルが爆発した。何の比喩表現も無く、身体の内側から爆炎を伴つて爆発した。

内通していたと思われる、三人の冒険者がいきなりボクに掴みか

かつてきて、それを止めようと他の冒険者が割つて入つて、いきなりボクとはレベルの違う戦闘が始まった。

結果は、相打ち。どうやら、ボクを守つてくれた冒険者さんたちの方が強かつたみたいだった……のに。

すぐに、件の賊たちが、ボクの前に現れた。  
賊たちにとつては、冒険者が死のうが死なまいが、関係の無いことだったんだ。

「お嬢ちゃん、オレたちの仲間になるか、奴隸になつて売られるか、慰み者にされるか、選びな」

そう、ボクに向かつて下卑た笑みを浮かべながら言つてるのは、頭領。自身も、元Bランク冒険者。生活に困つていないので賊になつたのは、自分も嵌められたから、だつたよつた氣がする。

そんなことは、どうでもいいのに……。

「ど、どうも嫌だつて言つたら、どうするの？」

「お嬢ちゃんの白くてフワフワした髪の毛を、べつとつぬとぬとこしてやるよ。その可愛らしき口の中も、な」

「ほ、暴力、反対だよ」

そう言いながら、魔力を練る。ボクだつて冒険者だから、戦闘ぐらいは行える。

負けるだらうけど。

「し、死ぬのは、恐いかな」

「オレが掲示した中に、死ぬっていうのは入ってねえだろ？ まあ、どれも生き地獄だがよ」

「ツー！」

その言葉を聞いて周りから笑い声が上がる。

ボクは、その言葉に反射的に反応して、魔術を放とうとした。それが頭領にも分かっていたのか、同時に魔力障壁を展開してきた。

なにもかもが、一枚上手。

だけど、今更、魔術を放つのをやめることなんてできない。そんなことをしたら、練つた魔力が身体の中で暴れてしまうから。

「ツー！ 戦場を奔り抜けろ！ 雷槍！」

直径五十センチほどの雷が、一直線に頭領へと突き進む。ボクが使える、一番強い魔術。

だけど、そんな攻撃も、まるで興醒めっていう感じで、魔力障壁に阻まれた。

霧散する、魔力。  
四散する、希望。

「お嬢ちゃん、決まったか？」

決まつてしまつた、ボクの未来。

ボクは、ボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクはボクは 答えない。

「決めない！ ボクは、王国に行きたいんだ！…」

そんな叫びに、一瞬静まり返る賊たち。

そして、見る見るうちに顔色を変えて、唾を撒き散らしながら、大声で笑い出した。

悔しい。なんで悔しいのかなんて、そんなことも分からぬほどに。違う、分かっているからこそ、悔しいんだ！

「ふえ、ふええ……」

情けない、泣き声が出る。

恐いから、怖いから。

悔しいから、悔しいから！…！

「決めない、といつのも 決意の一つだな」

音が消え失せるような爆音がその場を包み込む中、賊たちの後方から、透き通つた綺麗な声が聞こえた。

「それも、いいさ。あやふやな決意より、幾分かマシだ

男の人だ、というのは分かるのに。そうやって、周りの賊を雑草のように刈つていいくその姿は、どうしても人間には見えなかつた。

「まあ、僕は、そんな口弁を吐けるほど、人生経験は長くないけどね」

賊たちが吹き飛ばされていくその中で、ボクとその人は、ゆっくり目があつた。

紅い。

「 誰？」

「 気分屋の、殺神鬼だよ」

そういうと、『殺神鬼』と名乗った男の人は、ボクの前に立つと、背を向けた。そう、ちょうど、ボクと頭領との間に割り込む形で。

「名乗る意味は無いけど、一応名乗つておこつか。 近衛無音。  
通りすがりの、通行人Aだよ」

## 第一話・確認と説明と 邂逅と（後書き）

生徒「先生！廻くんが厨二病にかかりました！」

先生「おい、廻。頼むから授業中に『俺の右腕がア』とか叫んでくれるなよ」

生徒「先生！もう手遅れです！」

先生「ああ、廻。かめはめ波の練習をするなって。廊下に立つてろ」「廻」「はい！バケツ持つて空気イスつすね！やつベ<sup>ル</sup>わつくわくすんぞお！」

生徒「先生！逆効果です！」

「ご感想」「批判」「指摘、お待ちしております。

## 第一話・泣きつ面に蜂が刺す前に、笑わせてあげよつて懇つ

無音は腰に差してある黒刀を抜き放つた。実はこの刀、材料は普通の鉄ではない。

隕鉄と呼ばれる、隕石に含まれる鉄を精製・鍛錬して打ち上げた怪刀。その重量は普通の鉄よりも遙かに重い。およそ二十倍ほどの重量差がある。

そして、法力など込めなくとも、普通に名刀として使える、大業物である。

「正義の味方だなんていうつもりはないけど、悪役ともいうつもりはないな」

「あ、あの」

そうやって聞いてくるのは、今しがた無音が助けよつとしている女性だ。女性、と表現していいのか分からぬが。

白い髪に蒼い瞳がよく映える。まるで、空のように透き通つた蒼だ。顔は、童顔だろうか。年齢的に見て、十五歳ほど。文化水準から見て、じこじら辺が大人と子供の境目と言つたところか。

「話は、後でもゆつくりできる。キミは、戦えるか？」

「は、はい！」

がくがくと震えていた足と肩が、ゆつくりと落ち着きを取り戻し

ていいくのが分かる。

「やうかい。なら、巻き込まれないでよ」

「え？」

無音は果然としている賊たちを見据え、黒刀を両手で構えた。この程度の相手なら、わざわざ法力を込める必要も無し、だ。

「 剣舞」

たん、と。

その動作は、戦闘行為にしては、とてもとても軽いもので、とても軽やかで艶やかな動きで賊たちの中心に躍り出た。

その所作は楚々としたもので、まるで女形の舞の舞台のように、人々を引き付ける。

それは、敵も味方も、等価値に。

剣を振るつているのに、そのせいで風が舞い起こり、血が吹き荒んでいるところに、それすらも舞に対する付加要素のようにしか見えなくて。

白髪の少女の足が、一歩だけ、前に進んだ。

「…………ツ！？」

その足が急に止める。その足元に、暴乱の中央にいた賊の『一部分』が飛んできて、水気のある音を放ち地面上にへばりついた。

驚愕だった。

気付いたら、吸い寄せられるよつて、自ら死へと歩み寄つていた。

「なん、で？」

考えるまでも無い。あの所作に、あの一つ一つの動作に、精神操作の効果があるからだ。

魅入るという言葉がある。食い入るように見ていると、自然と体がソレに吸い寄せられる現象がある。それも一種の精神感応の一種だと言える。

この舞は、それらを究極的に突き詰めた結果だ。

「ふツ！」

無音が黒刀を振るうたびに、人が形を崩していく。斬る、という動作がここまで凄絶に見えるのは、決して『舞』の効果だけではないはずだ。

血すらも、演出に見えてしまつほどに。

「い、いきなり現れて、全部。全部！ 台無しにするつもりかよオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

そう叫ぶのは、今まで無音から一番離れた場所にいた頭領。それが、その手に持つている鎌を持って特攻を仕掛けてきた。

それを、右手の指一本で白刃取りをする。

「『いきなり現れて、全部』か。笑えないぐらい笑えるな

掴んでいた斧を自分の方に引き寄せ、斧を握る頭領の太い腕を蹴り飛ばす。

水氣のある音とともに、熟した果実よろしく真っ赤に弾け飛ぶ。

「ア、ああッ！？」

「あんただつてしているだらう、やり直す価値も無いよ、あんた」

無音は拳を大きく振りかぶる。

こいつの過去にあつた悲劇的な出来事なんて知つたことではない。過去が、現在につながるのは分かっている。

だが、過去を、現在に、繋げてしまつのは駄目なんだ。

肘から手首、拳にかけて一気に加速させる。それだけで腕の姿が霞む。

瞬間。ドパンッ！ と。空氣を食い破りながら放たれた音速の拳が、頭領の頭部をそのまま消し飛ばした。

中枢を失つた肉の塊は、糸の切れた人間のようにぶらぶらと腕を振り、時折身体を痙攣させながら地面に倒れ伏した。直後、吹き飛んだ首の断面から不気味な形で血液が噴き出す。

その光景に、ひつ、と周りから小さな悲鳴が起つ。一歩一歩後ずさつしていく賊たちに死体から視線を移す。

その頬には、飛散した赤黒い血が、瞳と同じような色の液体が付着している。

「 逃げるなら、今の内だぞ」

それが合図だつた。

あるものは持つていたシミターを投げ捨て踵を返し、あるものは腰の部分に黒い染みを広げながら走り去り、あるものは腰が抜けて

仲間に手伝つてもらいながら逃げて行つた。

「…………終わった、かな」

周囲には、無音が斬り飛ばした賊の肉片と、頭領の大きな体と白髪の少女しかいない。

「あ、あの……」

声を震わせながらせつ聞いてくる、白髪の少女。間違いなく、恐

「あ、あり、ありり、ありがと、『じやこまちシ一』。」

111

今度は口を押さえながら蹲つてしまつた少女。見たところ、なにか冒険するような格好で、動きやすさを重視した衣服、だらうか。もちろん、ただの衣服ではないのだろう。賊たちが身に着けていた薄汚れた服とは、なにか違う印象を受ける。

「大丈夫かい？」

「ひやい！」

「ぬるー？」

あまりにも唐突過ぎて、敵意も殺意も感じられないその行動。予想なんかできるはずもない、その行動。

つた。

覗きこんでいた無音の顎めがけて、である。

敵意も殺意も無かつたその一撃を、まともにへりへりしてしまった無音。今度は彼の方が蹲つてしまつ。

いや、少女の方も顎の先（無音の顎が異常に堅かつた）に頭の天辺がぶつかつたせいで、頭頂部を押さえながら蹲つてしまつた。

一人の少年少女が肉片が四散する現場で一様に蹲る光景。なんとも、シユールな光景だ。

「いだあい……ふええ、」

「ま、待とう！ 泣くのは待とう！」

無音は知つていた。このくらいの少女が泣くことの、その面倒臭が。

まづもつて、話が通じなくなるのだ。まるで地球外生命体と話しているかの「」とく、話が支離滅裂になり荒唐無稽になり、最後にはまったく違う話になつて眠りこけて終わり、ところの目には浮かぶ。

「ふえ？ えつぐ……あ、ありがとう、いざれこます」

若干目に涙を浮かべながらも、なんとか泣きわめくのはじりえてくれたようで、すつと立ち上がつた。

無音はらしくなく額に浮かんだ汗をぬぐいながら、慎重に言葉を選び、話しかける。この状態（泣く寸前）の少女は、ちょっとしたことで泣きかねない。

「キリの、如何は？」

「えぐ……ルル＝ノースクレインです……」つま

若干、泣き過ぎてえびている少女。

「そうかい。僕は近衛……ムオン＝コノエだ」

それを華麗にスルーしながら、華麗な自己紹介をやつてのけた無音。少女 ルルは、無音が自己紹介を終えると、だんだんと落ち着きを取り戻していった。

「えつぐ……むーひゃん、ですね？」

「…………うん、いいよ、それで」

これもまた、知っている。渾名をつけた方が長くなるのになぜか渾名をついたがるといつ、この頃の少女特有の性癖を。

「…………これから、どうしたがっていこうか？」

控えがちに自分より背の高い無音に上目遣いで聞いてみるルル。無音はまっくつと空を仰ぎ見ると、

「キリが決めるとい」

「……厚かましいかもせんけど、王国まで護衛を頼みたいんですけど」

「ここれ、別よ。あと、敬語はやめよ。やつこいつは、なんだか『思ひ出す』つまうから」

「？ は、……うそ」

「じゃあ、案内してよ。やの、中国でといへ、や」

少年は、少しだけ恥ずかしかつて後ろ頭を搔きながら、左手を差し出した。

「う、うそ……」

少女は田尻に溜まつた涙を払い飛ばし、その手を勢いよく掴んだ。

これが、『泣き虫』と『神殺し』の、出合ご。ただの、運命的な、出来ごである。

## 第一話・泣きっ面に蜂が刺す前に、笑わせてあげようと思つ（後書き）

「」感想」「批判」「指摘、お待ちしております。

## 第二話・神様だつて色々ある

「そ、その……むーちゃんは、どこから来たの？」

「…………」

開始早々痛いところを突いてくる少女である。もちろん、腹黒なんかではなく、純粹に無音に興味を持っているだけなのだろうが。

「も、もしかして、『神楽』の人？ ルブルム大陸じや珍しいもんね、黒髪の人」

「ま、まあ、そうなるかな」

神楽、というのはどこかの国の名前だらうか。日本にも確かこんな地名があつたが、どこにあつたかなんてことは忘れた。関係の無いことであるわけだし。

今の会話で、今現在いる場所がルブルム大陸だといつことを分かれ、黒髪という人間が少ないといふことも分かつた。

「いいよね～、東洋の島国。なんだか、ワフウっていうのがメインらしいよ、なにもかも。もしかして、その黒い珍しい形した剣も、カタナとかいうのなの？」

なんだか一気にオープンになつたな、なんてことを考えていくと、

返答がないのを不思議に思つてゐるのか下から覗きこみながら首を傾げていた。

無音は少しだけ慌てるそぶりを見せ、「あ、ああ。銘は『黒断くろだん』だ」と、聞かれてもいないことまで喋つてしまつた。

「わあ、格好いいなあ

わくわくどきどき、といった擬音が聞こえてきそうなほど無音の腰に差してある黒刀を食い入るように見つめている。知的好奇心が豊富なようだ。

「持つてみるか？（ムリだと思つけど）」

「え！　いいの？　なら、少し拝借……」

無音が腰から刀を抜き、ルルに差しだすと、それを嬉々として受け取つた。

数瞬後、ルルの身体が地面と熱い抱擁を交わしていたのだが。

「重量にして、百五十キロ。鍛錬もしてない奴が持つたら、こうなる」

「な、なんでこんなに重いの～」

「普通の鉄とは比重の違つ鉄を使つてゐるからだよ。そこら辺は、説明するのは面倒だから省くけど。同じ速さで同じ大きさの獲物を振れるなら、断然重量が重いものを振つた方が威力は大きくなる。故に、こうなつた」

木の棒と鉄の棒を想像してもらえば分かるように、どちらで殴ら

れた方が痛いかなって、やられなくても分かる。

「まあ、それにしても、普通は！」今まで重くしないと思つんだけどね」

「普通じゃなくとも、しないと思つけど……」

ようやく、大地との爽やかな挨拶を終えた（無音が刀を持ちあげた）ルルは、ヨロヨロと朝帰りの親父のようになつづく。

「ボ、ボクは宫廷魔術師志望だから、身体は鍛えてないし」

「ん？ それで、王国とやらに行くのか？」

「うん！ 王国 デノフリュー王国には大陸でも有名な魔術師の先生がいるんだ。その先生に教えを乞いに、毎年この時期になると大陸中から人が集まるんだ」

「…………、」

どうも、胡散臭過ぎる気がしないでもないが、この世界においてはこの子の方が知つてゐる。まあ、元の世界に関しても、大して変わらないと思うが。

「だとしたら、キミはその人の弟子になるのかい？」

「生徒になるの。那人、魔術学校を開いてるから」

さらに胡散臭さアップである。もはや詐欺の臭いしかしない。

噂で有名な先生と私塾の合わせ技と言つたら、なんといつても詐

欺しか思い浮かばない。

「そこに入るためにはまず受験して、千位以内に入らなきゃなんないんだけど……難しいだろうな。競争倍率、十倍だもんな」

「十倍か……」

軽く見積もって、その王国にはこの時期に一気に一万人もの少女が押し掛けるというわけだ。おそらく、その王国とやらもお祭り騒ぎだろう。

「はあーあ。授業料もコソコソ貯めたんだけどなあ。無理っぽいよなあ」

「その授業料とやらは、キミが働いてためたのか?」

「うん。冒険者になつて一生懸命働いたんだ。元いた街から王国の王都までにはこのウイード森林を通らなくちゃいけないから、そのための護衛も雇つたけど、……それが、このままなんだけね」

このまま、とこうのはつまつ、裏切られてしまつたといふことなのだろう。

「甘い話には裏があるつていうのは本当だね。ちよつと王都まで用事があるから格安で仕事を引き受けてくれる三人組だなんて」

それを信じた方も信じた方だろう。

騙す奴が悪いとこの場では言つべきなのだろうが、それは絶対とは言えないだろう。やはり、騙されるほうにだつて非はあるのだ。しかし、

「……まあ、慎重に、ね」

そんなことを言つて泣かれるのも面倒くせこので、無音は黙つておくれにしたらしい。これを彼女に知られると見くびつてゐるよつに思われるかもしけないが、そうではない。

この少女、泣き虫なのである。

茂みから出てきた小動物に對して必要以上に反応して目尻に涙を浮かべ、こけては涙を浮かべ、疲れては涙を浮かべ、涙腺が緩いのだ。

よもや、少し強いことを言つたぐらいでは泣かないと思つが、一応は念の為である。心配することとは無い。

「もしかして……むーちゃんも、ですか？」

「あの、もしかして、の意味があまり分からないんだけど」

嘘だ。分かつてはいるが、こつ言つのは自分の口で言わせた方がいいだろつ。

存外。天然なだけの少女ではなこらし。

「その、甘い話には裏があるつて……」

「ああ？ どつちだと思つ？ キリの思つてこる方になつてあげるよ」

無音は、自分で言つても意地悪な質問だと思つた。こんな質

問、誰に問つても答へは一緒なのは分かつてこぬの」。

「じゃあ、むーちゃんのままだねー。」

「じゃあ、キリの」とむーちゃんと呼~~め~~つか

「え？ それは、違つんじゃないかな？』

「じゃあ、るーちゃんか』

「べ、別にいいナビ……』

「嘘だよ』

「あ』

「まだまだ、子供な一人だつた。』

「異界の者を」ひりに連れてきただとシ！？ いきなり戻つてきて  
おいて、何を言つているのだ、フガクよーー。』

「五月蠅いな。少し黙つてくれ』

となりで喚く美しい金髪の女性の姿をした、この世界に神の一柱、ルベリア。たしか、戦と規律をこよなく愛する女神だ。

そんな大男の喚きを頭を抱えながら受け流すのは、白髪を後ろで結つてポニーtailにした優男。愛を司る、フガクだ。

一人がいるのは、神々の居城。北方大陸のさらに最北端に位置する場所に建てられた、道の構造物である。彼らはそこににあるテラスにいる。

「この世界に異物を混入させるなど、前代未聞だぞ！？ 世界という箱庭が、どれほど危ういバランスの下に成り立っているのか、知らないとは言わせんぞ」

「まあ、確かに俺が連れてきた少年はバランスを崩すことのできる存在だ。なんせ、俺を殺したんだからな」

思い出すのは、しんしんと降り積もる雪の上に横たわる自分の姿。全ての力を解放した自分が、相打ちであつても間違いなく一度だけ殺されたのだ。

「ならば、なぜツ！？」

「死なせたくない、つて思つたんだよ。あんたらみたいな高位の神サマには理解できないだろうが、生憎中位の神なんでな。人間の心とやらが、いい具合に分かつてしまつ」

「貴様はいつだって高位に昇り詰められる。それを再三貴様が流しているだけだろう」

「面倒臭いのは嫌いだ。俺は、遊べていたら、それでいいんだよ」

そんなことを手の平の上に創りだした炎の竜で遊びながら言つ。

「貴様がそんな性格だから、」のよつな」になってしまったので  
はないか」

「……誰かに操られてたつてのか？」

「そうとしか、考えられないだろう。私ではないぞ。私はそう言つ

「心配するな、あんたが馬鹿だつてのは周知の事実だから」

「頼むから神力をそんなに込めるな。もう死にたくない」

大気に悲鳴を上げさせながら息を切らすルベリア。今の一撃を放つとなると、富士山級の山のふもとが全て吹き飛ぶレベルである。

「……貴様がそんなにたるんでいるから、狙われるのだ」

大気を震わせていた圧力をゆつくりとなだめ、語調も少しだけ柔らかくする。

「……俺のことを快く思わない、って奴がいるってのか?」

「違うな  
今の世界が、気に喰わないんだ」

それは何故だらうか、とフガクは思う。今の世界は、とても素晴らしいものだ。

平和もあるし、戦争もある。裕福もあれば、貧困もある。生めれば、死もある。正義もあれば、悪もある。幸福もあれば、不幸もある。

偏りなどほとんどない……はずだ。

「人からの侵攻も、高位から下位まで充分に行き渡っているだらう？ それも、今の世界のお陰じゃないか」

「一極化」

その言葉に、黙り込んでしまうフガク。やがて、離れようとしなかつた唇を引き剥がし、声を紡ぎ出す。

「……人々の信仰を、占領しようつてわけか

神の力は、信仰心によつて成り立つてゐる。高位の神は、イコール人々によく知られているということで結べるだらう。

今は、それがほどよいバランスで、どの神々にも信仰が行き渡つていると言える。フガクなどは、その気になればもつと信仰心をあつめられるのだが、フラフラする方が性に合つてゐると氣付いたので、中位の神に納まつてゐる。

「リバーは、知つてゐるよな

「ああ、キレイだった」

「ダマレ。平和の神だ」

「ああ、あんたとは違つておしとやかで優しかつたな」

「…………、」

急に黙つてしまつた、ルベリア。なんだなんだ？ と隣の方を見  
てみると 莫大な神力が練られていた。引き攣りながら耳を澄ま  
してみると  
それは呪詛のような声にも聞こえて 立派な呪文詠唱だと、ギリ  
ギリのところまで気付けた。

「…………集え、光よ。神をも殺す、そのまばゆさで、我が敵を穿てッ  
！――」

「散れ、敵性。歯向かうべきは、空の彼方」

ルベリアから大氣の鳴き声と共に放たれた直径三百メートルの光  
が、反射鏡に当たつたかのように空の彼方へと消えていく。  
ルベリアは舌打ちをして、フガクを睨みつけた。

「…………貴様、やはり力を抑えているな」

「まあ、あの少年とは本氣で全力に暴走していたがね」

「チツ……リバーの神格が下がろうとしている」

これ以上の口論は何も生み出さないと思つたのか、話を戻した。

「…………つまい、人間の間で争いの意識が高まつてゐるつてことだろ  
？ それぐらい、いつものことじやないか」

「中位まで、墮ちそうになつてゐる」

「……それは、何万年ぶりだ」

「貴様が中位に、半ば自発的に墮ちた時以来、高位の神が墮ちた記録は無い」

ならば、六万と一年前か、とフガクは呟いた。そのころから、人の文明が少しずつ上がつていったのを覚えていた。

フガクが知つてゐる『あの世界』は文明としては科学に向かつていた。魔術に向かつたこの世界では、低度文明のよつた高度文明のよつた、そんな感じだ。

馬車のような移動手段もあれば、飛行機のようなものもある。

それは置いておくとして 愛のある生活が薄まつていったのは仕方のないことだ。政略結婚など、挙げればきりがないが。

「……前にも、あつたな」

「ああ。酷い戦争だつたよ。もう、何でこんなことをしているのか、何で憎しみあつてゐるのか、何で殺し合つてゐるのか そんな大戦争があつた。戦の神である、私でも、いやになるほど

「力が上がつた、な。俺と入れ替わりのよつた……」

「わ、私ではないぞ、今回のことには」

「知つてゐるさ。あなたは、優しいから」

手の平の上で雷と炎の小さな竜を創りだし、戦わせながらサラリと言つた。

それに、何かジワツと来るもを感じたルベリア。

「……だつたら、悪意の奴か、混沌の奴が、怪しいな」

一柱とも、高位の神。

それは人間が、それらのことを無意識の内に望んでいることを意味している。

それらもまた、仕方のないことだ。

「折角戻つてきたといつのに、この素晴らしい世界あそびばを滅茶苦茶にされるのは、いただけないな」

「戻るのか？ 天の坐に」

「…………いや、もう少し身軽でいたい。 責任だとからは、まつ

ひらだからな」

「…………そうか だが」

ルベリアはずいとフガクに顔を近づけ、険しい顔で、いつまつた。

「死ぬなよ」

どんな戯言を、と思つた。

なにせ、神は死なないのだから、そんな心配は全くの無用だと、

「下位の神が、死んでいる。いや、消滅していると言つた方が正しい。最近、ごく最近分かつことだが、神は死ぬ。消滅させられた神力が信仰を上回れば　死ぬ」

「……なわ、俺は」

「ああ。貴様も、あと少し神力を減滅させられていたら　消滅していただろう」

「まあ、『ボチボチ』やるぞ」

ふわっと、何も無い空に浮かび上がる。  
そのまま、フガクのいた空は、いない空へと、変わった。

「……アジュラと、カオスか」

「ひちも、『ボチボチ』やるか。

そう言つて、古城の中へと、姿を消した。

## 第三話・神様だつて色々ある（後書き）

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

## 第四話・半の女の方の手てつけの無いものへも、ここにかもしだれな

「むーちゅさん。…………暗いね」

「だな…………」

黒暗のひとを根暗と呼つたわけではな

当然、H國の近くで馬車を壊されて、一田で、こや半田でH國につくなんじ都合主義、そつそつ起こりな

今日は夜の野喰となつた。略すと夜喰である。

「…………風よ。消せ」

匂いを消し、獸が寄つて来ないうにする。氣配を紛らわせた方が安全だが、それなりにやつてきた獸を相手にする方が楽なのだ。

「ん? むーちゅさん、何かした?」

「ん、いや、別に」

隠す必要などないが、一応である。

「そつか…………」飯、用意しなくちゅだね

「干し肉ならあるけど」

「……むーちゃん、なんでも持つてる」

「持つているものなら、なんでもわ。無い時には出さないから、必然的になんでも出せる、つていうことになるだけだよ」

「？ むーちゃんだけに、難しいことを」

「上手くない。四十点」

「えー……」

そんな感じで夜を過ごす一人。キヤツキヤツウフフなどではなく、アハハハウフフである。

無音が火を起こし、干し肉を水で戻して、ルルが食べれそうな香草を拾つたり、果物を集めたり……ちょっととした夕食が出来た。

「ボクの料理スキル、見せますよー」

「炭にはしないでくれよ」

とか言いあつたり、

「お帰りなさいませ旦那様。お風呂にしますか？ 夕飯にしますか？」  
「それとも、ボ・ク・か・し・ら？」

「」飯お願いします」

「ノリ悪こよむーちやん

「なに？ 襲つて欲しかったの？」

「あう……」

無音はやはり意地悪つたのだが、しかしそこには笑いがあつた。あたりはすっかりオレンジ色に染まり、焚き火を一人で囲みながら、真っ暗になるまで二人は談笑していた。

無音は日本人だ。現代人だ。  
和の心と言えば やはり、風呂である。

土の法術を使い、掘り抜いただけの穴のよつた風呂場に、水の法術と火の法術を組み合わせ、お湯を流し込む。

ルルがそれを見たら、「結構裕福なんだね、むーちゃんちつて」と言われてしまった。魔術があるんだから風呂ぐらい当たり前に出来そうなのだが、そうではないらしい。

入浴するなら集会浴場で。それも国が仕切っているのでとても高い税金を取るらしい。なんでも、ここ数年はそれが顕著で、噂では

戦争のための軍資金を集めてこねりっこ。

なにはともあれ、入浴である。

無音が、「先に入る?」と、実に紳士的に質問すると、ルルが、「うえ? ……そ、その、お先にどう? ……あ?」と、何故かどもつてしまつた。

「……嫌な予感がするナビ、やつぱつお風呂は気持ちがいいなあ」

お湯をすくい顔にかければ、色々あつた今日の疲れも吹き飛ぶ。空を見上げれば、区切られていない空が、悠々とビリードも広がつていて。

「……一田田にして、あの世界での出来事が夢みたいに思えるな  
もつらん、悪い方の夢だ。しかし、一昔のひとせ跡ではなへ……、  
と。

「……? 歌?」

そんなことを考えてこると、遠くから歌声が聞こえてきた。まるで、ガラスのように纖細であり、鈴のように透き通つていて、一言でまとめるといふ

「 綺麗、だな」

「 ? ? ?」

それは、じんじん近付いてくる。幻想的な調べは木々に反響し、ざわめきが音楽団に聴こえそうな、そんな 、

「…………ルルか」

ぴたつと、唐突に声はやみ、辺りに静寂が戻る。そして、近くの茂みが、がさがさと動いた。

「なにしてんだ？」

茂みの中から、うすい布を纏つただけのルルが出てきた。胸は薄いが、少女から女性へと変わつていく段階か、丸みを帯びている。

「い、命を助けてもらつたから、だから、そ、その……」

「…………僕が、そんな奴に見えるのか？」

ようするに、助けてもらつたお礼に身体を差し出します、とかいうことを言つてゐるのだろう。

だが、恥じらいで顔まで真つ赤にする少女に対して、無音はそんなことをぴしゃりと言い放つた。ルルの顔に動搖が生まれ、やがて口を開いた。

「ち、ちが…………」

「…………違つながら、しちゃあ駄目だ。女の子なんだから。そういうのは大切にしなくちゃ駄目だ、な？」

「あう…………」「じめんなさい。てつきり、そう思つこんじやつて。冒険者の女友達も、『やつこつとん』は『やつこつとん的』だつて、話していたから…………」

“ひややひ、あの世界との価値観はだいぶ異なつてこないじい。助

けたから体を差し出せとか、そんな即物的な要求をするのは食えた  
サルどもだけである。

「生憎、食えてはい年頃の少年なんですね。襲うなら、とにかく  
襲われてると思つた」

「ひう」

なんだかルルの身体が縮こまつたように見える。

「ははっ。まあ、ルルは可愛いから、早く強くてカッ」「よくて優し  
い彼氏でも見つけるといいぞ」

少年はルルの身体を指差しながら、「透けてるよ」と言った。彼  
女は顔をさらに真っ赤にして身体を隠した。

無音は自覚なきオトコノコらしく。何を自覚していないかななど、  
言つまでも無いのだらう。

ルルは田尻に涙をこじませながら、ぶつくこと、「むーちゃんの、  
えっち」と言つた。

「今の場合は、ルルのほうが変態に見えるなぞ」

「あう」

「……その格好が寒いなら、中に入るか、服着てきなよ」

湯船と林の奥の焚き火をたいているところとを交互に指差しながら、真顔でそういう無音。ルルの身体がふるふると震えているのが分かるのだ。

ルルは顔をさらに紅潮せると、「あうあう」と呻きを上げなが

ら湯船の方を指差した。穴の幅は十メートルぐら *こぼる*、一人ぐら  
い樂勝だ。

「は、入るから、」*じつ*見ないでね?」

「もひ、ほとんど見たようなもんだけど

「あうう」

そんな意地悪を言いながら後ろを向く。お湯は乳白色なので（土  
から染み出した）、透けることは無いだらう。  
後ろからお湯の温度に、「あうん」と呻く声が聞こえるが気にな  
ない。

「い、いいよ……」

と。

少し震えた声が聞こえた。潤んでいるのかもしれないが。  
ゆっくりと振り向くと、ちょうど向かい側に、白い髪まで紅く染  
まりそうなほど顔を真っ赤にしたルルがいた。

そんなに恥ずかしいなら何故入つて来たんだ……、と心の中で呟  
いた無音。

「む、むーちゃんつて、へんな男の人だよね……これでも、旅の途  
中は何度か襲われかけたのに……」

「氣を操つてゐるから、ソッチのほうも操作できるんだよ」

「……じゃあ?」

「氣力だよ。氣力。いろいろと、いつやつて話しているのにも、結構な努力をようしてこる」

そんなことを涼しい顔で言われても困るのだ。ようするに、それは、偶發的な事故が起きてしまつと、別に故意的なものでなかつたとしてもあつたとしても、それはつまり、はつとした拍子でルルを襲つちゃうかもといふことを暗示しているわけで。

年頃の女の子であるルルは、顔を半分湯につけて、「ぶくぶく」と泡立て始めた。

「はは。僕が『ソノ氣』になつて氣の操作を解かない限り、永久的にソソンな気にはならないから安心して」

「…………はつ！？ なつ、なんでボクは残念がつて……ひやうううう」

「まちやん、と。水音を立てて、お湯の中に消えて行つた。  
やついえば、

「一昔にも、なんだか『ヘン』って言われたなあ

そのときも、お風呂に入つた時だつたか……と、

「ぶつひやあああああツー？」

田の前にルルが水を撒き散らしながら飛びだした。

……泳いでたのか、と若干呆れる。中は白濁としているし、高温なので田を開けたら痛いだろうに、そんなことにも気付かなかつたのか、「ひうあううつー？」とうなりながら田をこすつてている。

「だーいじょーぶかー？」

「だ、だいじょ……うぶ？」

と、そこで、無音の声が近いことに気付いたのか、一いつつていた手を離し、まじまじと無音の紅い瞳と皿を合わせた。

「…………なり」

「ちやお」

直後。拳が放たれ、入浴タイムは強制終了となつた。誰が誰になど、言わずもがな、である。

「「「めんなさこ」めんなさこ」めんなさこ」…………」

「いいよ、イタくなかったし」

焚き火を一人で囲みながら、何気ない雑談を交わす。一人を照らす仄かな火が、中央で燃えている。

「やつこえば、風呂に近づいてくると、何か歌つた？」

あの幻想的な歌声は、今でも耳に残っていた。

「え？ うそ。怖い時とかによく歌つんだ。作詞作曲はルルだよ」

パチパチ、と。無音が手を打ち合わせる。  
その行動に不思議な顔を浮かべるルル。

「ど、どうしたの？」

「拍手だよ。拍手拍手。すっごく綺麗だった。また、聴かせてよ」

思いつきを元を釣り上げ、田を細めながら贅辞の拍手を送り続ける。

思わずとこで褒められたのが恥ずかしいのか、「え、えへへ」としか言わなくなってしまった。

「じゃ、じゃあ、今、歌つてあげる。」

「はあ。今田は遅いから、また、今度にでも

「う、うん。」

やつら辺のおがくすと広い葉で作った簡単なベッドの上に寝転ぶ二人。

「おやすみ、ルル」

「おやすみ、むーちゃん」

ありがとう、と。

一人は、一人とも、心の中で、言つて合ひた。

次の日の朝。定刻通りに起きたとするべく、午前五時だ。この世界の一  
日が二十四時間ならば、だが。

小鳥のさえずりが聞こえる。横を見ると、「うにゃん」と気分  
よさげに寝言を言つてゐるルルの姿が。

…………安心、しずぎだらけ…………。

「…………起こすか、眺めるか。…………起こすか」

ルルが気持ちよさげに呻いてゐるそばに近寄り、「おやつちやう  
そ」と耳元でわざわざくと、「ふわん!」と身体を飛び起させた。

「嘘だよ」

「むーちやん、ひょっとして、意地悪?」

「今頃?」

「……あ」

それから。

簡単な朝食を済ませて『出立』の準備を整える。王国は、実はもうすぐそこにあるらしい。

そして、ゆっくりと歩き始めた。何気ない雑談と、何気ないやり取りと。王国に近づくにつれて、ちらほらと人とすれ違うようになっていた。

やがて、巨大な門が見える。

「むーちゃん、あれが、王都ベールクラウンの門だよ」

「……デカいな」

近づくにつれ、その大きさがまじまじと分かる。

「……まあ、ここでお別れだね」

「えつ？ なんで？」

ルルとは王国までの護衛を頼まれていたのだ。なので、王都に着いたからには、もう自分は用済みというわけで、

「いや、これからずっと一緒にわけにはいかないし」

「なんで？ むーちゃんって、何かすることあるの？」

「……ないな」

そういうえば、生きるといつ田標以外は何の田畠も無い。根なし草の放浪旅をこれからずっと続けるつもりだったのかと思つと、自分の無計画性が恥ずかしくなつてくる。

そこで、ルルがこちらに手を伸ばしてきました。

「こっしょじや だめ、かな?」

「………… あはつ

一つだけ笑つて、その手を取つた。

第四話・年下の女のアピールに行くのも、いいかもしれない（後書き）

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

第五話・笑ひてしおりへりこ遼那先生が、それでこころだと感じぬ

あにこまあ！ おんぶ～！

はいはい。かずねは、あまやんぼさんだな。

たつかーい！ あにこまあ、もつともつとー

ははは。そらー！

ひや-----たつかああい！

まさかの一戻ジャンプ！

ひやん！？ ひつぎゅうううう！

はははは！ かずね、つまは向してあせぼーか？

つとね、おにこひー！

じゃあ、ぼくが『鬼』だ。<sup>じお</sup>十数えるから、

にげるうううううう！

いーち、いーい、そーん、しーい、いーお、るーく、し

一ち、はーひ、くーう、とおー……あれ？ かずね？ ビーひー  
つたの？

ビーン！

のおつー？

あにさま、だあいすきー！

……ぼくも、だよ。かずね。

「……夢、か」

布団をゆっくりと引き剥がして起きよつとするが、まつたくもつて動けない。身体右半分に男性としたら幸せな感覚が広がつていた。そう。氣を操作していな朝ボケ状態の無音なら興奮してしまいそうなほど、

「……うひもん

「ツー」

何故かルルが無音の布団に潜り込んで、抱きついていた。服は寝巻で、薄いカーディガンのようなものを羽織つただけの状態で、ほとんど直のような感触で……、

(操作……操作アツー)

なんだかんだ、達観したような口を叩いても、所詮は思春期の十七歳なのだ。女の子のあられもない姿を見れば、興奮したりする。

「……いやおん」

「……安心し過ぎだ、馬鹿」

無音はそういうと、散々な寝起きで物凄くだるい身体をルルから引き剥がしながらゆっくりと起こした。

周囲を見渡すと、向かい側にもう一個シングルベッド。間には簡素なテーブル。窓からは朝日が差し込み、外からは慌ただしい市場のざわめきが聞こえる。

「宿か……」

あの後、来たには良いけど試験までにはまだ日があるから、ということで早速宿にチェックインすることになったのだが、冒険者風の出立ちの少女と、黒い刀一本ぶら下げた少年をどこの宿が快く引き受けてくれるというのか？

もちろん、ギルド運営の宿屋である。

一階は酒場とギルドカウンターがあり、二階と三階には宿屋がある。

ギルドのメンバーであると宿泊料が格安になるという宿だ。主に、

初心者冒険者によく使われるらしいのだが、その初心者冒険者よりもこの世界のお金を持っていない無音は、やむなくルルのヒモとなるしかなかつたのだった。

「ヒモは、……なんだうつ、僕の奥底でそれは駄目だと叫つている気がする」

ならば、と。

この世界で簡単に慣れる職業と言えば、冒険者である。資格や条件などはほとんどいらない。後は、ギルド受付嬢の営業スマイルでも見ながら、書類に力キ力キするだけでオーケーなのだ。

まあ、命を顧みない、という条件だが。

「ルルも寝てるし……今の内に行つてくるかな

やつひとつ、そそくかと腰をかけていたベッドから立ち上がり上がって部屋を出でていった。

一階に降りると、既にギルド従業員が慌ただしくそこかしこを行つたり来たりしていた。ギルド従業員、酒場。この二つから連想される人物像と言えば、ウェイトレスである。

まさしくそのウェイトレスが、冒険者の英気を養うための食事を

準備するのに追われていた。流石に朝からアルコールを摂取するツワモノはいないうらしいが、肉類など精がつきそうなものをたっぷりと注文してがつついていた。

無音はそれを横目で流しながら、ギルドカウンターの方へと歩んでいった。

かべにちいさな小窓が開いたようなそれに、大人っぽい顔つきで朝の酒場の雰囲気を楽しんでいる女性の姿があつた。

そんな彼女も少しだけ異質な雰囲気を漂わせて近づいてくる無音に気付いたのか、びくりと緑色の視線を彼へと向けた。

「やつほー。少年、はじめてましてかな、かな？」

「はじめましてですね、はい」

若干女性の明るい雰囲気に圧倒させながらも、クールなキャラを崩さずに返事をした無音。

「今日はどういった用事かな？」

「ギルドの登録つて、誰でも出来ますか？」

「出来ちゃうんだなこれが。名前以外はほとんど偽で構わない。そんな破格の条件で、ギルドに登録が出来ちゃいます」

「ぶいぶい、と。なんだか妙にハイなテンションで応対してくる受付嬢。

改めてその容姿を見てみると、それなりの美人。十人中五人は絶対に振り向き、残りの五人は趣味によつて異なる、そういうた美人

だつた。

黄色い髪に、おつとりとした碧眼。猫のよつに丸められた目元。

「じゃあ、登録の手続き、お願ひします」

「はいはーーん。ほい、これにサインပြရှုံး」

ぽんぽん、と。一枚の羊皮紙と、一本の羽ペンを渡された。その羽ペンを手に取ると、何か不思議な力を感じる。昨日、王国に向かう途中にルルと話した魔術とやらだらうか？ 根本的に法術とは理の違う力が適用されているらしい。

まあそんな小難しいことは置いておき、早速偽装オンパレードの手続きに入ろうとしたところ、そこで、はた、と気がついてしまった。

(……文字つて、日本語でいいのか？)

駄目だらう。

アメリカで日本語を、『これが母国語なんだから仕方ないだろ！』と叫ぶぐらい駄目だらう。

駄目なのだらうが、そこはご都合主義とやらが働くのが様式美である。美しくなどないが、様式美なのである。

羽ペンでサラサラと、ムオン＝ノノエと書き、出身地はカグラ、近接戦闘が得意、などなど、真実と虚偽を織り交ぜながら、見る人が見れば、少しだけ有能な人間、に見えるぐらいのプロフィールに仕上がった。

その羊皮紙を受付嬢に渡すと、「ふむふむ」と個人情報を眺められた。

恥ずかしい。嘘なのだが。そんなものである。

「へえん、カグラ出身なんだねー、少年は。一回行ったことがあるけど、うん、まあ、悪くは無いね」

「アリでしょうね」

「うふ、自分の見た目によくあつた偽情報だ」

「…………」

「この女、常人ではない？ という疑念が無音の中で生まれた。僅かに殺氣立つ無音を見ながら、受付嬢は、「怒らない喚かない騒がない」とたしなめ始めた。

「なんで、分かつたんですか？」

「分かつてないよ。カマかけただけだものね。それに見事に引っ掛けってくれただけだよ、少年が」

あたしみたいな一介の受付嬢が、情報の虚偽なんて分かるはず無いじやんきやははー、と笑われてしまった。

アリやら、無音少年は、とのやり取りに関しては、大してうまくは無いらしく、人とのやり取りのプロである受付嬢には敵わなかつたようだ。

「で、アリするんですか？」

「アリもしないよ、つと」

そういうのと、てきぱきと何かの準備に取り掛かる。

脇に置いてあったプレス機械のようなモノに、羊皮紙を挟むと、  
がしゅん！ とこう音を立てた後、下の方から何かが出てきた。

それは、カードであった。

「はい、ギルドカード」

「はい？」

「正式名称は、ルブルム大陸公式ギルド会員証明書とも言つ」

とも言つ、ということは、やはり正確な名前ではないらしい  
ではなく、

「いいんですか？」

「だから、最初に言つたじやん。名前以外は、ほとんど偽で構わな  
いって。本人が本名以外を書くと、そのペンは文字が書けなくなる  
仕組みになつてるしね。そこは魔術を応用しているわけだけど、本  
名つて言つるのは、その人の魂を表わすらしいから、だから、それを  
利用しているみたいなんだね」

本人もよくなは分かつていいようで つまり、

「おめでとう、これからよろしく。少年」

というだけのことなのだつた。



## 第五話・笑ひこよひぐらこ適切に生きねば、それでいいんだと感じる（後書き）

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

## 第六話・『ボチボチ』やつていへじひかる

「ふまーい！ 王国のお料理って、美味しいね！ ね、むーちゃん？」

「……そうだな。ルルの作った、いや、創つたというべきかな？ 朝ご飯、否、暗黒物質<sup>ダークマタ</sup>よりは大分美味しいと思つ」

「あ、あれは！ ボクが魔力操作を間違つて、」

「ほん！ 新鮮な卵が見るも無残な暗黒物質<sup>ダークマタ</sup>に変質したというわけだねルルくん。それを僕に食せと、言ってきたわけだね。たしかに卵つてのは貴重らしいから、無気にするのが嫌なのは分かるけど、それで僕の舌は今でも麻痺しているというのに、味の分からぬ僕に対しても当たつけとしか思えないのだけども？」

「……あう」

とまあ、王国についてから一日の昼。朝の、愛のあるお料理ローナーで一時的に味覚を失つた無音を尻目に、ルルは美味しいそうなスープとパンをぱくぱく食べている。

「け、けどさ、ボク的には結構いけたと思つんだよ？ あの、」

「暗黒物質」

「うん、もう暗黒物質で良いけど。ボクは食べれたのに、なんでもむーちゃんは」

「知ってるか？ 人って、自分を客観的に見れない生物なんだ。だから、自分が作った料理は例外なく美味しいと感じてしまうんだよ。たとえ、それが暗黒物質だとしても」

「じつにこよむーちゃん！ 過去を嘆くばかりの男は嫌われちやうよー！」

「現在進行形で僕の舌は麻痺してるけどな」

まるで「ゴムを噛んでいるかのような感触に顔をしかめながら、何かの肉を咀嚼し、飲み下していく。味がしないのだから、もう泥でも啜れそうな気分だ。

そんな、過去ばかりに囚われる男、無音少年を少しだけむすっとした表情で睨むルル。

「大体、女の子が男の子の為に作ってくれたものなんだから、文句言わずに食べなきゃ」

「文句を言わずに食べた結果が、これだよ」

「むきーー そんなこと言つてばかりいると、むーちゃんの朝ご飯は毎日アレになっちゃうよー。」

「激怖い」と言つたよ」

そんなこんな、あんなこんなで 、ギルドの受付嬢前。

「あら少年。もつ女の子を引っ掛けたの？ 手が早い」との上な  
いわね」

あの後名前を教えてもらつた受付嬢、ウホールという女性。猫の  
よつな雰囲気。子供っぽい性格で、クールに接しようとすると無音の  
上を行く。いい意味であるとは限らないのだが。

「違います！ むーちゃんはボクのこと助けてくれた恩人なんです  
！ そんな女つたらしじやありません！」

そこで反論するのが、ルルである。白い髪を揺らしながら、勢い  
よく反撃した。

それを見てウホールはくすくすと笑い、「ヒモ生活だもんね。そ  
りやあ女つたらしじやないよ」と痛いところをついてくるのだった。

「ウホールさん、そのヒモ生活を脱するためには、なんか割の  
良い仕事ないですか？」

もう面倒くさいからせつと仕事進める猫女、と言いたいような  
顔をして言う無音。

それを分かった上で、まだヘラヘラと笑いながら、ウホールは、  
「分かったわよーん。割の良い仕事、ね」と脇に置いてある資料を  
あさり始めた。

掲示板にでも行けばそれなりの仕事は揃つてゐるが、どれもこれ  
も『しょぼい』。しょぼい上に、報酬も少ない。

ここで一気にヒモ生活を脱する決意をした無音。

今度はこっちが養えるようにと 何故、養つ養えないのことこ  
なつてこいるのかと、そう疑問に思つたこの頃。

「あつたあつた。これなんぞいつかな？」

少年だつたらできんじゅうじゅうね？ と少し軽い調子で出してきた依頼書には、こんなことが書いていた。

「『ロックードラゴン』龍の討伐？」

「ね？ 少年なら出来るんじゅうない？」

そんな軽い調子で出してきた依頼は、Aランク。間違いなく、成功すれば英雄と認め讃えられるほどの依頼だった。

「あの受付嬢さん、どうかしてるよー。」

それが、宿舎に戻つたルルが最初に言つたことだつた。言つ、といつよりも、怒鳴ると言つた方が正しいが。

「竜種だよ、あのーー頭討伐するのに、国が動くつていうーー？」

「ルルは自分が受けたわけでもないのに、何でそんなに怒つてんだ？」

一息も置かず、ルルは、

「怒るよー。友達だもん！ むーひちゃんのことば、我が身のよー。」

右手を腰に当て、左手の人差し指を、ビッシュイー！ と向けられる。やれやれ、と首を横に振ると、頭をぼりぼりと搔きながら、こり言つた。

「オニーサンに任せろって。報酬がよかつたら、僕が色々援助するから」「

それぐらこの恩は感じてるから、と無音。

しかし、それでもルルは納得がいかないらしく、激昂やら憤慨やら、怒りのイメージがどんどん高まっていく。

「だ・か・ら！ ドラゴンなんだよ、ロックドラゴン岩山竜ヒンショントロックドラゴンつてこいつのはー！」

「よしはー、ランクトとこつても、」

無音は、音も無く、いつの間にかルルに近寄り、その頭に手を置いた。

そして、ゆっくり動かし始める。

「大丈夫、だつて」

屈託ない笑顔をルルに向けると、彼女は顔を真っ赤に染めて、「も、もう知らないんだから！」と言つて、「あううううううー！」と叫びながら布団に潜り込んでしまつた。

少し、子供扱いが過ぎたかな？ と、少々後悔するが、先に立た

ないものの代名詞である後悔など、するだけ無駄だと無理矢理思い込んだ。

怒り：恥じらい＝×：×の心模様なようである。  
とにかく、機嫌を取り戻そうとルルに話しかける。

「ルル、入学式はいつだ？」

「まずは入試が先だよ」

若干イライラした声でそう言われてしまった。顔も合わせてくれない。こうなれば、苦し紛れの笑いを浮かべるしかないのだが。

「入試は一週間後。もし、合格したら、その一週間後に、入学式だよ……」

少しだけもじもじしたよう、「うう」と云ってきたルル。顔は合わせてくれないが。

こちらも、苦味が少しだけ薄れた笑みを浮かべながら、ルルが潛り込んでいる布団を眺めて、

「分かった。なら、入学祝いに、杖でも新調しようか」

もう、ルルが入試に合格できる」と前提で話を進める無音。

「むーちゃんの……バカあ……」

家財道具の集中砲火を浴びせかけられ、やむなく部屋を強制退去させられてしまった。頭を庇いながら一人一部屋の手狭な部屋から出ると、ぱたんと力無くドアを閉じた。

そのドアに背を預けながら、天井を仰ぎ見る。

「…………まあ、『ボチボチ』やるか」

普通、冒険者になり立ての無音がAランクの依頼を単独で受けることなどできない。それは、ギルドの最低限の配慮でもある。だが、今回無音は、その依頼を受けた。

「少年。知ってる？ 少年が持ってる、その羽。そうそう、腰に差してた黒い羽。それね？ ウィード森林の主、レイブンクロウっていう魔物の羽でね？ Bランクの魔物なんだ。だから、そのこと、ギルドマスターに話したら、ああ、無断でごめんね、『話したい』だつてさ」

「だ、そうだ。

それから、応接室のようなところに通せられると、出できたのは白髪の、精悍な顔つきの老人。ゆとりのある服、というよりも布のような、宣教師のような格好をした老人が出てきて、「ギルドマスターのユビルだ」と手短に自己紹介をした。

「さて、その羽。どこで手に入れたんだい？」

「千切って

黒刀でずばんとやつたあと素手でブチブチ、これ以上なく簡単な説明だ。

それにコビルも、「そうかい」と頷くだけだった。彼は、何か考えた後、今回の依頼書である羊皮紙を両者の間に掲示した。

「冒険者には、いくつかの形がある。その中の糧を得るために命を懸ける者。富や名声を得るためにその身を果ての無い冒険に捧げる者。強くなりたい者。出会いを求める者。死地を得たい者。……君は、どんな冒険者になるんだい？」

それは、答えなどないのだろう。よくある、全てが答えの問いだ。何を言ったところで、「そうかい」としか言われないような、そんなありふれた問いだ。

無音は、しなし考えた後、低い天井を仰ぎ見て、コビルに視線を移す。

「人間臭い、冒険者！」

その答えに対しての返答は、やはり、「そうかい」だった。

「ローレンス岩山地帯。そこで最近、ロックドラゴン岩竜が暴れている。原因は不明だが、急速な対処が必要だとされている」

依頼書に視線を落とす一人。そこには、伝承の岩竜を表わす絵と、簡単な説明。

コビルはそれらに補足説明をしながら、淡々と告げていった。

「ランクとしてはA。だが、場所が不安定だ。あらゆる意味で、安

定していない。いまでは行かずとも、そうだね、A + ぐらこはいく  
だろう。それでも、君はこの依頼を受けるかな？」

「受けますよ」

少し、気になることもありますし、と、一瞬も間を置かずに言つ  
た。

それにはユビルも少し呆れたようだ、「若いね」と呟いた。精悍  
な顔つきが、苦味を含んだ笑顔でくしゃっと歪んだ。

## 第六話・『ボチボチ』やつてじゅうじゅう（後書き）

「」感想」「批判」「指摘、お待ちしております。

第七話・氣りこて、歸りかたれて、氣づかせて（前編）

甘酸っぱい。

## 第七話・氣づいて、氣づかされて、氣づかせて

何事にも、先立つ物は必要だ。金が、金が必要なのだ。綺麗事など、クソ喰らえがお決まりのお金である。  
さて、ここで旅の準備にかかるお金はどうくらいかかるのだろうか？

ローレンス岩山地帯への道のりは、往復二週間。  
その間の食事や路銀、移動手段等々、出費も結構なものになるのだ。

さて、無一文、近衛無音少年は、旅に出られるのだろうか？

出られるのである。

あの、黒い羽根。魔導具の材料として、かなりの高品質のもので、ギルドがそれを買い取ってくれた。

金貨一枚。平民の年収の半年分だそうだ。

さて。これでヒサ生活は脱したようなものだが、無音はそれでもこの依頼をやめよつとはしなかった。

無音は旅に必要なものを王都の市街で買いながら、あの依頼書のことを思い出していた。

「その、岩竜つて突然暴れ出したんですか？」

あの会談時、無音はユビルにそう問い合わせた。

野性動物が（この場合モンスターだ）暴れて周囲に被害を及ぼす、  
というのには、必ず何らかの理由がある。

人間とは違い、大した理由も無く、その力を振るわないからだ。  
娯楽を求めず、ただただ合理的に『生』を望む彼らが、何の理由も  
無しに、突然暴れ出すなんてことは、ほとんどあり得ない。

ならば、そこには理由があるはずだ。

そこには、同種族同士での縄張り争いとか、人間の土地開発による  
影響だとか、食糧難に襲われたとか、はたまた、自然災害による  
突発的暴乱など、理由はある。

ユビルは少し考えた後、一枚の紙を懐から取り出した。

それは、羊皮紙などではなく、ちゃんとした紙だ。質は荒いが、  
なかなかどうして、羊皮紙よりは見栄えがいい。

「『カメラ』というものはご存知かな？ ギルドの技術部の方で開  
発したものなのだが、如何せん、まだまだ改良の余地はあつてな、  
白黒でしか物体を映すことが出来ないのだが」

そう、それは写真だった。白黒というより、セピアというかなん  
というか、明治だと昭和だと初期に撮られたようなものだが  
「写真だった。

「いえ、寡聞にして知りませんでした」

知つていておかしそうな情報はなるべく知らないふりをする。余  
計なトラブルや欺瞞を生まないためのテクの一つだ。

その一言をユビルは疑つた様子も無く、「で、この写真なのだが」と話を続けた。

「その依頼の場所である、ローレンス岳山地帯で、ギルドの職員が偶然撮影したものなのだが、発光物体、と言えばよいのかな？」

そこには、眩く光っていると思われる、何らかの物体が映っていた。

余程遠くから撮影したのか、それは点ほどにしか見えなかつたが、点ほどにしか見えない物体がそれほど光を発していたわけで。夜に撮影されたのか、空をも薄暗く照らしている。

不気味なほど、神々しかつた。

そして、その光、見覚えが、ある。

「これが、一か月前。そして、その一週間後ほどから、岩竜の暴走ロックブリーゴンが始まった」

「ギルドとしては、この発光物体が関与していると？」

「いや、それはわからん。これが何なのかさえ、わからない状況なんだ。まさに正体不明、不得要領、曖昧模糊の塊だ。ギルドとしても調査を出したいところなのだが」

そこで黙つてしまつ。

そう。その調査を出したいところに『岩竜ロックブリーゴン』が暴れているものだから、何の調査も出せない。下手に出そうものなら、全てが死体となつて、それで終わり。

死体。

痴態。

そうなるのだけは、避けたいと言つたところか。

「やつですか。じゃあ、これで」

向かい合つて腰かけていた上等なソファから腰を上げようとすると、急にゴビルに話しかけられた。

「……本当に、大丈夫なのかね？ キミは、将来有望だ。ここで數十年務めてきただけの老人が言つているだけなのだが、それでも、光るものを感じる。いや、既に光つているか。本当ならば、万全を喫して、Uランクの冒険者にでも依頼すべきなんだ」

なんとも言えない前傾姿勢になつたまま、その言葉について一考した無音だったが、答えるなんて出るはずの無い、ただの疑問だったので、そのまま立ち上がつた。

しかし、答える必要のないものに答えるのも、また、人間関係か、と思い、無音は口を開いたのだった。

「大丈夫か大丈夫じゃないかといえど、限りなく大丈夫なんじゃないですか？ ほら、岩竜つていうぐらいですから、ノロそうですし」

僕、これでも足の速さには自信があるんですよ、と。地を駆ければ音をも超える少年が言つには、あまりにも物騒な言葉だった。これに対してもまた、「そうかい」と、呆れたように答えるしかないゴビル。

「にいちゃん！ で、それ、買つの、買わないの！？」

「ん、ああ、こめん。干し肉ね」

露店の乾物屋のおじさんに声をかけられ、急に意識を戻される。まあ、最初から大したことを考えていたわけでもないので、そのま

ま手に取っていた干し肉を一週間分ほど、買わせてもらつた。

それを入れるのは、ギルドから支給された魔導具で、なんでもこのポーチの中には数百倍の体積の物が入るとか。

ギルドで崩した金貨一枚分。銀貨百枚は、やはりかなりの大金らしく、先程からかなりの買い物をしているが、あまり減っていない。

「にいちゃんも、冒険者かい？」

「まあ、そうだな。成り立ての駆けだしだけや」

「そりゃい。だが、おれにはにいちゃんの光るもののが見えてる。有名になつて、成功したときは、『この店の干し肉食べたおかげ』って言つてくれよ」

「はは、まあ、考えておくよ」

「よし。じゃあにいちゃん、毎度！」

古き良きを感じた気分だつた。

それから、着替えとか、様々な旅の為の支度をし、何をするでもなく、街をぶらぶらする。

なんというか、気まずい、という奴だらうか？ と無音は心の中に芽生えた身に覚えのない何かしさを感じる。もちろん、ルルとの喧嘩についてのことなのだが。

ルルが一方的に悪い、というわけではない。無音だつて、自分のかたくなさがこれを招いたことだと分かつてはいた。本来であれば、あそこは自分が退くべきだったことも知つていた。ルルの怒りも、自分のことを心配したことだということも分かつてはいたため

に、なかなかビリしてやつに行く。

だがしかし、無音にだつて何の意味も無く頑なになつたわけではない。

微かな、きな臭さ。

最初は、ただの杞憂程度だとは思つていた。だが、ギルドマスターであるコビルの話を聞いて確信した。あの写真を見て確信した。

あれは、『神』に類するモノの、光だ。

全身の血が、沸いた。

どうして、自分の身がこれほどまでに昂つている理由を、無音は自覚していた。自覚させられたと言つた方が正しいかもしだれないが。

自分の存在意義。

自分の存在証明。

そこには、いつも、『神』がいた。

神を殺す為に、愛も無い男女の性交から生まれた自分の存在意義など、存在を証明する方法など、やはり、これしかないのだ。

殺神鬼。

神を殺す、鬼。

人外。人でなし。

所詮は、それだけなのか、と。

無音は、次第に暮れはじめた、オレンジ色の空を見上げながらそう思つた。

妹を守りたい、と思つたのも、やはり、それが関連していたからなのか。

だとしたら、自分はとても滑稽な人生を送っている。そう思わずにはいられなかつた。

結局。その程度でそれだけでそこまでなのだ。自分が命を懸けていた理由など、ただ、神程度の存在を殺すことだつた。

あの血の騒ぎ。

ようするに、『歡喜』。

自分の存在意義を、自分の存在証明を、見つけられた時の、言い知れない、心の底からの歡喜。

たつた数日、自分が日和つていたことなど、全て幻想だつたかのよつに、全身が歡喜した。喚起、した。

それが、どうしようもなく 嫌だつた。

そんな風には、思いたくない。  
だからこそ、『ボチボチ』。

「……『ボチボチ』、やる、か

無音の紅い瞳の奥まで、夕焼けは染めていた。

ちよつと考へてゐるだけ。そう思つていたのだが、随分と長いこと思考に耽つていたらしく、街は完全にオレンジ色に染まつっていた。出店などは、何か作業でもしている、この世界で言つところの魔術でも使って、明りでも灯すのだろう。それ以外にも、昼とは違う顔を見せ始める店だつてある。

呼び込みなどをを行う娼館など、色っぽい。

そこに、不釣り合いなほど、白い白い少女が立つてゐた。

息を切らして、ふわふわした白髪を乱雑にして、清楚なワンピー  
スを泥だらけにして、無音の前に立ち止まっていた。

立ち止まっていた。

無音を、立ち止まらせていた。

「……ルル？」

「はあっ、はあっ、はあっ！」

どうやら、ずっと走っていたらしく、息も絶え絶え。蒼い瞳が、若干充血しているのが分かる。俯いている。

酷く 憔悴している。

「大丈夫か？ 具合、悪そうだけビ」

いつの間にか、昂っていた血が治まり、冷静になった頭で、無音はルルに近づく。

そして、気付いた。

泣いて、いる。

「ルル？」

「 した」

途中まで喋っていた言葉は、か細過ぎて聞き取れなかつたが、最後の言葉は、喉がしゃくりあげたのか妙に高い音だつたが、聞きとれた。

喉が、嗄れている？

俯いていた顔をいきなり上げると、田尻に溜まっていた涙が、オレンジ色の光を浴びてきらきらと光る。

そして、叫んだ。

「心配した！ しんづ、しんぱいしたつ……」

一言曰はまだしも、二言曰は、またもしゃくりあげてイントネーションがおかしなことになっていた。

そこで、思い至った。

まさか、あれからずつと泣いて、泣いて泣いて泣いて、いつまでたっても帰つて来ない自分を、探しに来たのか？ ど。広い王都の中を駆けまわり、叫んで、泣き叫んで。歌が得意だと言つていた。だったら、喉は、大事なはずなのに。嘆らしてまで、自分のことを、探してくれた。

「「、「ごめえ、ごめんなさいっ！ 偉そりに、いちやつて、ごめんな、わあいっ！？」 いのち、たすけてもらた、のにイ、え、えら、えらそりに言つちやつてえ、ごめえ！？」

しゃくじあげて、泣くのを我慢しながら、泣いている。必死に、笑おうとして、泣いていた。

「これ、これからはあ、ちゃん、ちゃんとするかつら、もう、ひと、一人にしない、で！」

裏切られたのだといふ。

何も知らない少女は、何も知らないままに、裏切られたのだといふ。

そんな少女の前に一人の少年が現れて、助けてくれた。

何も知らない少女と一緒にいてくれた。

笑って、冗談を言い合って、全部、受け止めてくれた。

そんな少年が、つい、カッとなつて言ってしまった言葉の所為で、いなくなってしまった。

もう、帰つて来ないんじやないのか？

また、一人になつてしまふのだろうか？

僕は 、

「ほら、帰るぞ、ルル」

相も変わらず、僕は、気づくのが遅い。

慰めの言葉もなにも送らず、ただ、手だけを伸ばした。

ルルはその、ともすれば頼りなさ氣な細い手を見つけて、更に泣いた。オレンジ色に染まる王都の一角に尻もちをつき、もつと泣いた。

少女の思いなんてものは正確には分からぬいが、ただ一つだけ言えることがある。

少女の抱いていたソレは、紛れもない、初恋だった。

第七話・気づいて、気づかされて、気づかせて（後書き）

「」感想」「批判」「指摘、お待ちしております。

## 第八話・フラグを建てない神殺し

「ちやんと魔術の練習していろよ。これでルルが落ちたら、僕は一体全体何をしに行つたんだって話になるからさ」

「わかつてゐよ。だから、ちやんと 帰つてきてね、むーちやん

これが、朝の会話。それはとも、ともともとも、神殺しの少年には普通すぎて 眴し過ぎる日常の一編だったけど、その言葉が、とても嬉しく感じた。

だから、次も、嬉しくなると信じて、何気ない日常の一編から、少しの間だけ抜け出す無音。

一旦の別れ。

だから、訪れる憎しみの時もまた、一旦、やつてへるのである。

「風よ。我が身を覆いて、その役を果たせ

法術、詠唱バージョン。

王都の門を出たところで、それを使用した無音。小賢しい言靈を使うのが面倒になった場合、直接『命令』を下した方が速かつたりする。

この場合、言靈を使つると『風よ。まえ』だろうか。

『ま』に、風を纏う命令を下し、『え』には風を重ねたり、回転させたりといったオプションを付ける。

とにかく、どちらでもいいとして、無音は空を飛んだ。

空を飛ぶ。なんの補助も無しに、人間が素のまま大空を舞う。これ 자체は、人間の口マンだ。

だが、実用性が無い。空から攻められるという利点。これがバトル漫画とかでは騒がれているが、そんなもの、相手も空が飛べたら霧散霧消。踏ん張りが利かないついに、逆に言えば、地上からの集中砲火にあつ。

蠅とハエトリグモ、どちらが強いかと聞かれれば、そんなのは答える必要も無い。

そんなことよりも、そんな小さなことよりも、空を飛ぶというのは、とても気持ちがいいもので。

眼下を過ぎ去つていく森の景色。つい先日、無音が吹き飛ばした森の一角が眼にはいるが、そこはそこで、無機質に広がる光景にアクセントを出しているような、そんな気がしないでもない無音。ただの思い込みの上に、現実逃避なわけだが。

「1Jの速度で行くと、ローレンス岩山地帯には一丁で行けるわけか

馬車での行程が一週間らしいので、経費なども考えると、断然、空の旅である。その間、法力を消費し続けるのだが、まあ、些細なことである。

しかし、ここまでくれば、奇運である。

たまたま助けた少女の行き先が、たまたま王都で、たまたま自分の担当をしてくれたのがウェールという女性で、たまたまその女性が掲示した依頼が岩竜の討伐で、たまたま、というには必然的なほどに、神に類するモノと、巡り合わせた。

これが、奇跡と呼ぶものならば、あまりにもくだらなさすぎる。

「……というより、僕は神と出会って、神と類するモノと出会って、何がしたいんだろうな」

その問いかけは、誰にするでもなく、彼の中で堂々巡りをする。やはり、殺したいだけなのだろうか？ と、改めて思う。自分の存在意義について思い返すと、無性に腹が立つし、存在証明をするにしたつて、それがまた、存在意義と繋がる。

結果、自家撞着だ。

大方、この世界に自分を連れてきたのはフガクだろうと、大体の予測はついている。

ただ、それなら、何故一音は一緒ではないのかと、その思いも一緒になつて廻り合つ。

ただただ、廻り廻つて、何と会うでもなく、螺旋を形成する。

「輪廻、か。僕もまた、それに組み込まれているだけの、駒つてわ

けか」

思つことすらも、手の平の上。  
いつも思つだけで、自己を否定してゐるよつで、なかなかどうして、  
辛い。今更、何を辛がることがあるのかと聞かれれば、何でも、と  
答えるしかない。

ようするに、たつた今氣付いた事実だが　　自分は根暗なんだな、  
と、それだけのことだつたりした。

そんな、どうでもいいシリアスな思考をしてゐると、ふと、思つ。  
殺神鬼、だと名乗つてはいるが、よくよく考えれば、人を殺し  
た方が多いのではないか？　と。

殺人鬼なのか、殺神鬼なのか、よく分からない。

そして、人を殺したのに、何も感じない時点で、自分は、おかし  
な奴なんだと、改めて認識させられる。

ふう、とため息をつくと、思つ。

こんなことを考へるのもまた、どうでもいいことなんじゃないか、  
と。

ローレンス岩山地帯。山間などには鉱脈が走っていたりして、王国の収入源の一つだつた。だつた、といづのは過去形だ。ようするに、現在はストップしているわけだ。

一か月前からの、岩竜の暴走の影響を受けて、採掘場の洞窟が崩落する危険があるらしい。そんなところで作業員を働かせるわけにもいかず、王国にとつては手痛い休みになつてゐる。噂では、戦争すらまことしやかに騒がれているのだから。

その、ふもとの町。最初は村と形容すべきだつた場所が、鉱物の採掘の中継ポイントとして、立派な町となつた。

クイール町。その、採掘の重要な中継ポイントとして王国に貢献していることから、名誉賞や補助金も出されているほど。そこまで、発展している町だ。

いつもは、採掘を終えた工夫たちの荒々しい声が街中に響き渡る、昼時。

メインストリートである通りにも人はまばらで、そこいらに座り込んでいる工夫たちの顔には、活気が感じられない。

錆びれた町、と形容するべき町だな、と、無音に少しばかり失礼な考えが頭をよぎつた。

そのところは無音も事情を知つてゐるので分からなくもないが、これは酷過ぎる。暴れているのが竜種だからだろうか、希望が感じられない。

この町は、一枚岩だつたらしい。

鉱山の採掘、というだけの町だつたらしい。それ以外には見物なんてあまりないし、それ以外のことを思いつくことさえできない。いや、思いつこうとすらしていない。

結果的に、墮落。このありさま、なのだろう。

無音としてはどうでもいいことなのだが、まさかギルドまでこんな風になつていないうるうな？ と若干焦る。モチベーションの問題だ。今から仕事をする場所がこれだと、萎える。

「ギルドは……」

しばらく探索を続けた後、やはりギルド関連の建物は大きく、そして活気があった。

活気というより、騒々しいというか。

中に入ると、冒険者と思われる人間がギルドカウンターに押し寄せ、次々と依頼を受けていく。

（採取系？ なんだか、装備の割には地味なことをしているな）

そう思わずにはいられなかつた。

ハンマーやら大剣やらを装備した大男が、大挙して採取系の依頼を受けている。なんだか、期待はずれというか、夢がへし折られたとか、そんな気分を感じる無音。

無音は知らなかつたが、只今鉱物の値段が高騰中。それと同じく、採取系。鉱物採掘を目的とした依頼の報酬が上がつてゐるわけだ。そして、その際に余分に鉱石でも採掘して行けば、ラクラク小遣い稼ぎである。

一般人には行けないとこには、冒険者が行く。  
国としても、ギルドとしても、一般的にその命の保証はしない。  
ならば、有益に使うまでである。

「たしか、ギルドの人に問い合わせれば、補助を受けられるって言

つてたつけ？」

使われるだけでなく、こちらからも使う。利潤を求めた関係。それが、ギルドと冒険者。単純に、それだけなのだ。

「すみません。王都の方からやって来たんですけど」

少しだけ声を張り上げて言つと、一人のギルド従業員が駆けてきて、「待つていました！」と両手を取つて泣いて喜んだ。

それは、男？ なのだろうか。

制服の型としては男モノなのだが、それからひょっこり出ている顔は、可愛らしい、どこからどう見ても女の子である。金髪は左右に跳ねて天然パーマを形成し、気の弱そうな碧眼は今は喜びで満ちている。身長は百五十ほど。

どこからどう見ても、女の子。

女の子なのに男モノの制服？ と、疑問が堂々巡り。

そして、ある種の解答を導き出した。

（つまり 性同一性障害か！？）

なんともまあ、場違いな勘違いをした無音だつた。

『そういう知識』がない無音にとつて、この邂逅は結構新鮮だつたらしく、少しだけ眼を輝かせていた。

つまり 男の娘との、邂逅だつた。

そして、ここにフラグなど、建つ予定など、どこにもない。

「いやあ、本当大変でした。ここ数週間は、特に。鉱石の採掘量が激減していますから、それに伴って値段も高騰して、ギルドに来る採取系の依頼の数が半端ではなくなってきて。冒険者さんたちも貪欲に依頼を消化して行つてくれて、今は平行線を保つてますが、それではぼくたちの体が持たなくて ほら、あそこの人」

そう言つて女顔ギルド従業員が指差したのは、カウンター。一人の受付嬢が大量に来る冒険者を捌き切れなくなり、泡を吹いて倒れた。

「もう、三人目なんです」

ギャグにしか見えないのは、気のせいだろうか？  
そんな風にしみじみ言われても、なんだか、ギャグにしか見えない。

「あなたの実力は問いません。つていうより、もう勝ち負けなんてどうでもいいから、早く現状をどうにか、どうにかあ！」

男の娘にすがりつかれる神殺し（17）の図が出来上がるわけだ。

「どうにかするから、離れようか」

そして、抱きつかれた神殺し（一七）は、どまでもクールだった。

どくなく、男にしては柔軟で狭い肩に両手をあてて、押し返す。

「で？ 今、どに岩竜は居るんだ？」

その単語を男の娘、ギルド従業員に言つと、黙り込んでしまった。まるで、そのことを言つのは憚られるようだ。

「どうした？」

「それが…………」

その説明とは、無音の予想を少しも裏切らない程度の、予想内の予想外といったところだつた。

その説明を受けて、一言礼を言つた後、無音は町をぶらぶらと散策し始めた。

どににいるのか分かりません。

これぐらいのことは、どんな冒険者でも予測済みだらう。だから、無音もほとんど驚かなかつたが、「まったくわかりません」と何度も言つので、驚いたというより呆れたという方が正しいか。

最初から自分で探す覚悟ぐらい決めている。

ただ、ローンス岩山地帯の広さと地形が厄介だつた。

山、というのだから、風だつて一直線に進められるわけではない。時折吹く擂鉢状の風に気を使いながら法術を使つたりしなければならないし、その範囲も、ウイード森林の比ではなく広い。

(探索に一日かけるとして、次の日に様子見として一回アタック……そして、三日で完全に終わらせぬ)

風の法術を使えば移動はすぐ行えるのでそこまであせぐ必要もないが、嫌な予感がする、といえばよいのだろうか。よくある漫画での『キン』とかの効果音はならないが、それでも、直感めいたモノが働いている。そう感じさせる、確信のようなものを感じていた。

例えば、例の未確認発光物体のことだとか。

そして、嫌な予感すらも、予想の範囲内だったりした。

予想外のことで、時間をかけるわけにはいかない。本当ならば、今日中に終わらせて、空を飛んで帰っているところだったのだから。

失敗をしないよう三日は時間はとるが、それ以上は、必要はない。

何が起こるか、三日で終わらせて見せる。  
と、ここまで無音が頑なになつていてる理由といえば　やはり、  
ルルの存在か。

なんだか、あれからというもの、やけに彼女のこと意識し始めていてる自分のことに気付き、時折赤面してたりしていた。

それが何なのか　　まだ、分かりはしない。

竜、という存在がいる。

その名 자체は、一般的に広く普及し、その恐ろしさも、口伝のみで広く伝わっている。

一説に、最上位の竜種は、その咆哮のみで千の人間を薙ぎ払うだとか、一頭の竜が国を滅ぼしたとか、その鱗にはどんな魔術を効かないだとか、人語を話せるだとか、人に化けるだとか、神の小間使いだとか、神に抗う存在だとか。

その恐ろしさは、聞いただけでも分かる　なんて妄言、誰が言ったのだろうか？

その恐ろしさなど、実際に遭遇してみないと分からぬ。

咆哮のみで万の人間を薙ぎ払うその姿、国を守る城壁を紙屑のように引き裂くその暴力、魔術師団千名による一斉掃射すらもいとわぬ防御力。

そんなもの、聞いただけで、それだけの想像が出来るといふのか？

十の十兆乗、なんて数字が思い浮かべられないのと同じように、その恐ろしさもまた、想像できない。

「あー、見つからないな」

と。

そんな恐ろしい竜を、気楽に探す少年、近衛無音十七歳。彼にとつて、恐ろしいだとかそんなことはどうでもよく、倒せればそれでいいのであって、それ以上でもそれ以下でもない。

広大なローレンス<sup>岩</sup>山地帯を移動しながら、風の法術を使つてい  
く無音だったが、ここまでヒットがないと、飽きてくる。

ここまで、ところのどこまでなのかといつと、朝から昼までだ。  
そうでもない。

「……これ、か？」

それでもない時間が少し経ち、やつとのことで、『それらしき』  
反応があった。

数十メートルの巨体。全身が<sup>岩</sup>のよつに隆起しているのが、風か  
らの感触で分かるのだが、『それらしき』感がぬぐえない。

なんだか、よく知つている感じが、纏わりついていくといつが。

「けど、おかしいな」

しかし、おかしい。

これは、この感じは、間違いなく、神に類するモノの感じだ。  
ぴりぴり。知覚するだけで、体が拒絶反応を起すような、知覚  
しただけで破裂してしまいそうな、そんな感じ。

その感じが、岩竜そのものから、感じられるのは、ビリしてだろ  
うか。

「洞窟、といつより空洞だな、これは」

眼下には、千メートル級の山があるのだが、明らかに不自然。い  
や、人間程度が見れば、それは一端しか見えないので、よく分から  
ないだろうが、上空から見下ろせば、周りの山との不自然さに、  
違和感を覚える。

突然現れたかのような そんな印象を受けてしまつ。

そして、その『山とこつよつ、 もはや張りぼて。

中身が全て、 空なのだった。

まるで、 魚のよつこ。

まるで、 賀のよつこ。

内側にいる『なにかしら』を、 守つてゐるかのよつこ。

その千メートル級の山は、 そこに鎮座していた。

「あら、 だれかしら」

後ろから声がする。

そして、 そう知覚したときには、 体は下方向に加速していた。 銳く鈍い、 そんな痛みが、 そんな両極端の痛みが、 全身を鋭く鈍く駆け巡った。

たかだか百七十センチ後半の少年の体は瞬時に、 カラの山へと落

下し、 突き破つた。

そして、 地面へと激突する。 叩きつけられる体。

背中を強く打ちつけ、 絶息する。 全ての酸素が体外へと排出され、 横隔膜が異常に張りだし、 息を吸わせてくれない。

「ツ！ つぐ、 は、 つはつ！？」

これだけで済んだのは、 単純に彼の肉体の強さにある。 何とか息を吸いこめた無音は、 痛みに顔をしかめながら、 辺りを

警戒した。

ぼやあっと、淡い光。

無音が開けた穴からは太陽の光が一條。  
大空洞の、中央。心臓部。

そこに、三十メートルの巨体に淡青色の光を帯びた、岩竜が居座つていた。

ごつごつとした、硬質な白色の岩の肌を持った、竜。どんな砲撃でも跳ね返してしまいそうな、その威容。

ぴしり、と。

唐突に、その頭部に、亀裂が奔つた。ルルがあそこまで取り乱した、あの岩竜の額にある。

まるで、蛹から羽化する蝶のよう、みりみりと、『カラダ』を顕現させていく。

瞬時。岩竜の身体が猛烈な突風を伴い爆裂した。

思わず顔を覆い、そして、眼を開ける。

紅い瞳が捉えた、そこには　　半透明の『胎児』が、いた。

## 第八話・フラグを建てない神殺し（後書き）

「感想」「批判」「指摘」お待ちしております。

## 第九話・最強が負けても

それは『胎児』だつた。宙に浮いてい、不思議な。何かを大切そうに握りしめていの手はまだまだ小さく、頭は体の比率に反して大きく、膝を抱え込むように丸まつていの体は、まだ、頼りなく、腹部から伸びる臍の緒は、大地へと繋がつていた。

しかし、瞳が、紅い。

血のよう、血のよう、血のよう。  
ぎょろりと見開かれた、その、愛らしいはずの瞳は、何かを求めて動きまわつていた。

そしてその体からは尋常ではないブレッシャー圧力が、生まれている。

「なん、だよ」

神殺し、なんて名乗つてはいるが、まだ一柱しか殺していない。  
そして、殺せていたのかも分からぬ。  
しかし、今はそんなことどうでもいい。

目の前の『胎児』は、間違いなく、神、のレベルだつた。

「殺す」

邪悪。

無音とて、無差別殺神鬼になるつもりはない。彼がフガクと戦つたのは、殺し合つたのは、単純に一音がいる世界を守りたかったで、フガク自体に憎しみがあつたわけではない。

ただ、目の前。

全長五十センチ程度の『胎児』からは、えもしれぬ、そう、危機を感じた。

腰に差してあつた黒刀を狂つたように引き抜くと、一気に、全身全靈を込めて、法力を込めた。

そのとき。

言い難い圧力が、彼を真上から叩き潰した。

無残にも薄暗いカラの大地に、体全てを押しつけられる。

「が、つあッ！？」

全身の骨が軋む、鈍い嫌な音が、小さく響く。  
めりめり。

このままでは、体が地面のシミになつてしまつシーと、無音は力を振り絞り立ち上がつた。

その瞬間、謎の圧力が消えた。唐突に、ふつと。

「ツガアアアー！」

這いつくばつたまま、四足歩行獸のような恰好のまま、無音は前へと突進した。突進というよりも、発射。地面が爆発し、体は音の速さへと達する。

ほぼ、無音が『胎児』に攻撃を加えると同時に、後方から音が合流する。

百五十キロの隕鉄の塊が、空気を砕きながら、『胎児』に殺到する。触れれば、触れさえすれば弾け飛ぶ、そんな斬撃。

音は、無かつた。

ただ、振り下ろされた黒刀は、何も断つことなく、『胎児』の額すれすれのところで、何かに阻まれ静止していた。

「ケ、ケケ」

その『胎児』から、半透明のなにかしらから、声が漏れだす。

「ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ！」

奇つ怪な見た目通りの奇つ怪な笑い声。

喉だけで出しているようなその笑い声は、何にも響かず、ただただ音を発しているだけ。

それだけなのに、無音は恐怖を覚えた。

それこそ、フガクと戦った時以上の、なにかしらを。

「あら、死んでいなかつたの。騒がしいと思つてきてみれば、あらあら。人間、よね？」

無音が叩き込まれた天の穴から、その一条の光を身にまとつて、一つの姿が舞い降りる。

銀色の直毛は腰まで伸びており、体に纏うのは一枚の大きな布。まるで、ギリシャ神話にでも出てきそうな姿をしたそれは、

「わたしのこどもに、なにをしているのかしら？」

「土よ！　たて！」

地面が盛り上がるのと同時に

岩の壁になにかしらの攻撃が加えられ、一撃で吹き飛ばされた。消し飛ばされた。

『たて』には、『立て』と『断て』、『盾』の三重の意味を附加していたにもかかわらず、一撃で吹き飛ばされた。

こんな存在を、彼は知っている。

「『きげんよう、にんげんくん。わたしのお名前は、イーウェン。』『創造と破壊』を司る、神よ」

『創造』。それは、人の運命。  
『破壊』。それは、人の真理。  
『創造』し、時代を生き抜き。

『破壊』し、時代を変化する。

創り創られ、壊し壊される。

それが輪廻として続く中、その中に変化を見出すのが進歩。古きを壊し、新たを創る。

そして田の前にいるのは、それを司るモノ。

運命と真理という二つの大局を信仰として得ている、高位の神。イーウェン。

その力は 現在のフガクを超える。

「創造。最終兵器・ラグナロク終末」

ただ、その拳動は緩やかで、鮮やかで 死のイメージを無音に与えた。

青白い雷が手に集約したかと思うと、それは、またたく間に剣へと変化する。

剣。武器。兵器。

「構えなさい、人間。私の<sup>1</sup>じどもに手を出した罪、ここで清算してあげる」

ここで、戦力の差。

あのときは、一音がいた。防御を主とする一音がいたからこそ

だが、ここは無音一人。

甘く見過ぎていたか。

「構えてやるよ、神様。何だか分からぬけど……」

「

「構えてやるよ、神様。何だか分からぬけど殺してやるよ。

そう言つて、黒刀を構えた。

ローレンス岩山地帯ものが揺れた。

ぐりぐらと。まるで、震源はそこにあるかのよう、広大な岩山地帯が揺れ動く。

黒い刀と白い剣がぶつかるだけで、そこを中心として激しい揺れが巻き起こる。

衝撃波として、同心円状に広がつていく。

「へえ、あなた、噂の異物くんね？」

「異物？」

爆発のような剣撃を無音に向けて叩き下ろすイーウェン。それを空中で受け止め、受け流し、柄の部分で殴りつける。

ぐわん、と後ろにのけぞるイーウェンだったが、まったく気にした様子も無く、またも攻撃を加えてくる。

「そ、うそ。フガクくんから連れてきてもらつたのじゃ？ 命からが、フガクくんを一度殺したそ、うねえ？ ゆ、いじやないの？」  
そういふとか、と。  
既に、この世界の神々は、無音がこの世界へと落ちたことを知っているのだ。

だつたら、これはその異物である自分を排斥しようとしての行動かとも思ったが、それにしてもイーウェンが現れるタイミングがおかしい。それに、イーウェンは、「わたしのこども」と言つていた。ということは、あちら側としてもこれは予期せぬことだった、ということだつたに違ひない。

「デスマーティラクション  
破壊。酸素」

「ツー？」

呼吸をした瞬間に、意識が飛びかける無音。  
この場の空気の濃度が、どつと薄くなつたよつた、そんな感じがする。

「かぜ、よ。……まわ、れ！」

ゴウ！ と周囲の風が旋回し、カラの山の中の空気を搔き混ぜる。なんとか酸素を取り戻したころには、次の剣撃が無音に襲い来る。崩れた体勢のまま体を横に投げ出すと、倒れる間もなく受け身を取り、四足獸のような体位でイーウェンに飛びかかった。

「クリエイタ。創造。断崖」

斬りかかろうとしたその瞬間、無音の腹に激痛が奔る。

大地が、いきなり隆起を始め、無音の身体を打ち据えたのだ。いや、それだけではない。無音はそのまま上空へと体を持って行かれ る。

殻を破つたところで、急激な気圧の差に肺がおかしな収縮を始め る。

危機感を覚えた無音は法力を黒刀に込め、断崖を切り刻んだ。しかし、その碎いた瓦礫の先から、剣を構えたイーウェンが断崖 を駆け昇つてくる姿があった。

「土よ。爆ぜろー。」

断崖が弾け、その礫が四方に飛び散る。

それで足場を失つたイーウェン。空中に躍り出た体を、しかしながら焦つた様子など微塵も無く、無音の体を眼で追つていた。

「創造<sup>クレイト</sup> 階段<sup>ステップ</sup>」

こいつ、と。

何もない空間に、イーウェンは足をつけた。

そしてそのまま、風のような速さで無音の懷に潜り込むと、蹴る動作をする。

その一瞬。

「空を飛ぶのと、空を駆けるの。どちらが便利でしょーか？」

状況による。

そう答える間もなく、無音の身体は再度カラの山に蹴り落とされ

た。

芋虫のように痛みに蹲つていると、その近くに、イーウェンがふわりと降り立つた。

「もうやめにしない? 結局、よくよく考えてみれば、私のことには手を出していいわけだし。私、弱い者いじめは、嫌いなのよ」

「うる、たー。殺す……殺す！—」

無音の瞳が紅く光を仄かに放つ。

ハニハニは仕方かなとそん間にため息を吐くと

「自分の『業』に呑まれている時点で、あなたの存在なんて、その程度なのよ。いくら嫌だと思っても、ね」

数時間後。

そこには、襤襪衣のようになつた無音の姿と、少し息を乱し、所々に傷を負つたイーウェンの姿があつた。

「さみしさ、戦闘描[画]すら必要ないわ」

「…………、」

死んだと思ひのではないかほど、痛めつけられ、ぴくりとも動かなくなつた無音。

その姿を、悔穢を込めた表情で見つめるイーウェン。

「ただの『業』に呑まれた存在は、弱くなるだけよ、少年」

「…………く、そ」

悩んでいたはずだつた。

自分は、そんな宿命なんか嫌などと、そつ思つていたはずなのに。

見つけるまでは、冷静でいられる自信があった。自分の決意は堅いものだと、あの少女のためにも、と。

だけど、黙りだつた。

あの『胎児』を見た瞬間から、理性なんてものはほとんど残つてなくて、イーウェンが現れた瞬間から、もづ、殺意しか残つてはなかつた。

今、叩き潰された今だつて、殺意が止まらない。

「さみは、炎竜の討伐に来たのでしきう？ だつたら、これを持つて行くといいわ」

「さみは、炎竜の討伐に来たのでしきう？ だつたら、これを持つて行くといいわ」

それを無音の胸に置くと、ふかふかと浮かぶ『胎兒』もとに近づくイーウェン。

「この子が邪悪な氣を発していたのは、私の破壊の方を受け継いだからよ。だけど、それだけなの。だから、これ以上は関わらないで頂戴ね」

「まで、よ」

ぐらあ、と糸の切れた人形が無理矢理立ちあがったかのように、両の足で立ち、イーウェンを睨みつける無音。

そして、そのまま拳を握りしめ、ようよろと歩くと 倒れ込むように、その拳をイーウェンに振るつた。

それをイーウェンは 避けなかつた。

崩れ落ちる無音を見下ろしながら、にっこりとほほ笑むと、

「さよなら、少年。言つておくれど、私は、きみの味方寄りよ」

そう言つと、『胎兒』を抱えたまま、天井の穴から、出でいった。一條の光が差し込む中、仰向けに寝転んだ無音は 右拳を、大地へと叩きつけた。

その拳は、痛かつた。

「……………」

## 第九話・最強が負けても　（後書き）

「感想」「批判」「指摘、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7955x/>

---

神殺し～優しい殺神鬼～

2011年11月23日15時48分発行